春の光は呪いの鎖になる

しゃけ式

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

愛する果てが呪いなのか、呪うほど愛してしまうのか。

お互いが望む鎖ならば、それはもうエンゲージリングとして差し支えないのではないのか。

これはお互いがお互いを歪に愛してしまった話。

目次

1話 1
2話 11
3話 23
4話 40
5話 49
6話 59
7話 74
8話 85
9話 93
10話 102
11話 112
12話 121
13話 128
14話 136

1話

§

「俺達は、もう会わない方が良いかもしれませんね」

初めて口付けを交わした橋の上。月は頭上に構え、その光が俺と陽乃さんを照らす。陽乃さんの表情は豊かでこれまでにも沢山見てきたはずだが、今の顔は見たことがない。

――あんなに、寂しそうにする陽乃さんは初めて見た。

「……うん。そうかもね」

俺と目は合わさず、陽乃さんは橋の下に流れる川を眺めていた。

「比企谷君が言わなかったら、私が言ってたよ」

辛そうな笑顔。今日初めて合った視線は、しかし熱を帯びる前に逸れた。

流れる雲が月を隠す。昼間太陽によって温められたアスファルトは、月によって急速にその温度を奪われていく。

「まあ、俺なんかに陽乃さんは勿体ないですから」

本心でもあり、強がりでもある。無理やり合理化しようと口に出して納得しようとするが、今までの思い出がそれを邪魔する。

「陽乃さん」

「何？」

「今まで言ったことありませんでしたね」

急に何の話だ。そう言いたげな目を受け止め、逸らさずに目を合わせた。

「好きです、陽乃さん」

その瞬間、交わった俺達の視線は確かに熱を帯びた。

§

卒業式も終わり、晴れて俺は春から大学生となる。奉仕部の部室での最後の挨拶も終え、俺は桜の咲き乱れる帰り道を歩いていた。視界は桜の花弁のピンク、それに白い雲一つない青空。眼下では乾いた土瀝青（アスファルト）。これほどカラフルな景色は高校生であった頃は見た覚えがないな。いや、厳密に言えば三月末日までは俺はまだ高校生だが、それでもこれほど晴れ晴れした光景はいつになく新鮮に映った。

なぜこんなにも晴れやかな気分なのか。考えたくもないが、そんなことはわかりきっている。つまるところ、俺はまた性懲りも無く一人に戻りたかったからなのだろう。無論あいつらといた時間は無駄ではなく、むしろ実りの多かったものだったが、こと放課後の時間という点において俺は制約を受けていた。無論この後も奉仕部の関係は続いていくだろう。ただ自由な時間が増えたというのは、ただそれだけで解放される意味を持つのだ。

桜並木を歩く。小町は生徒会としての後片付けがあるらしく、俺は誰もいない隣をふと見ては静かに笑う。ぼっちであることに苦悩した俺が、今はこうして一人でいることに喜ぶ。盛大なアイロニーに身を任せ、通学路よりも少し遠回りをして帰る。

『俺はお前らのことを大切に思う。……だから、この関係はこれからも続けていきたい』

部室で言った最後の挨拶。俺はその締めくくりにそう言った。その場に居たのは俺を含めて四人。俺、雪ノ下、由比ヶ浜、そして平塚先生だ。一色も来たそうにしていたがそれこそ生徒会の仕事があり出ることは叶わなかった。

その言葉を言った時の三人の顔は文字通り三者三様だった。雪ノ下は目を見張って微かに笑い、平塚先生は困ったような顔をして頭を掻いた。

由比ヶ浜は、酷く悲しそうな顔をしてそっかと呟いた。

罪悪感がないと言えば嘘になる。事実その後の由比ヶ浜の涙を目に溜めながら言った〝ありがとう〟は今までのどの謗りや嘲りよりも胸に刺さった。その棘を無造作に引っこ抜くのは危険で、そうして俺は気にするのをやめ一人で奉仕部の部室を出た。晴れ晴れとした気分は一種の呪いのようで、しかしこの思考こそが一番由比ヶ浜のことを気にしてしまっていると自覚して眼前に広がる視界を別のものへと変えた。

橋の上で桜が舞う。花霞とはよく言ったもので、雪のように美しい白は陽気な日差しと共に橋を包んでいた。そして独り、そのこの世のものとは思えない景色をただの背景にしている女性が、哀愁を伴って眼下に流れる川を眺めていた。

「あれは……」

デニムに白のシャツ、そして青のニットカーディガンを着ている女性は桜の中でも強い存在感を放っていた。均整の取れた顔つきにメリハリのついた体型。しかし今の彼女の纏っている雰囲気は過去にあったどの時にも見たことがなく、一瞬誰かわからなかったほどだ。

「雪ノ下さん」

普段なら間違いなく声を掛けない。それなのに話しかけた理由は、なぜだかそうしなければならないような気がしたから。

より俺の感覚に近付けて言うなら、雪ノ下さんの匂いに惹かれたから。

「ん、ああ……比企谷君」

対する雪ノ下さんの反応は想定していたものよりも何倍も薄く、いよいよこれが本当に雪ノ下さんなのか疑わしくなってくる。

「どうしたんですか。今日テンション低いすね」

「それはこっちの台詞。何？　君が話しかけてくるなんて雨でも降るのかな？」

「今日の降水確率は五十パーセントらしいですよ」

「こんなに晴れ晴れとしてるのにねえ」

雪ノ下さんは橋にもたれかかりながら空を仰ぐ。どの部分を切り取っても絵になる辺り、やはり彼女は雪ノ下さんで間違いない。

「で、何してるんすか。こんなところで」

「なんだろうねぇ。なんか全部投げ出したくなっちゃったのかなぁ」

瞬間、彼女の放つ蠱惑的な匂いは濃度が高まる。正体がわからないものなのに、いや、正体がわからないからこそこんなにも惹かれてしまうのか。

「……何、急に笑って」

「え？」

「え、もなにも、気付いてないの？　君今すっごい笑ってるよ」

「いやいや、そんなわけないでしょう」

そう言って頬の筋肉を確かめる。冗談だと思っていたのだが、雪ノ下さんの言うことは本当で俺の頬は確かに上がった状態で硬直していた。

「もっと正確に言うとにやけてた。それも知らない人が見たら通報するレベルのね」
「そんなレベルですか……」
「まあこーんなに可愛いお姉さんと出会えたんだもんね？」
「女は星の数ほどいますよ」
「星には手は届かないんだよ？」
「星はいずれ消えるんですから、触れないくらいが丁度良いと思ってるだけです」

この人との会話は楽しい。俺のくだらない言葉遊びにも付き合ってくれて、さらに俺の想定を超えることも言ってくれる。口では嫌がっている俺だが、本心では楽しんでいる部分がないと言えば否定せざるを得ない。

「ね」
「どうしました？」

それまでの静けさを伴った雪ノ下さんとは異なり、俺のよく知っている雪ノ下さんは突然思い出したかのように口を開いた。

「君卒業式だったんだよね？」
「ですね」
「なら誰かに告白された？」

この人は何を馬鹿なことを言っているんだ。そう言おうにも、今日

の俺のやったことさえあの大きな瞳に看破されていそうで、すぐには否定出来なかった。

「いや、まあそんなことはありませんでした」

事実ではある。そこにどんな想いが絡まっていようと、事実であることに変わりはない。

「ふ～ん……？」

答えは出たはずなのに、なおも雪ノ下さんは疑った目をしている。橋の上ではまだ桜が散っている。俺と雪ノ下さんは白い花弁に包まれながら、言葉を交わしていた。

「じゃあ賭けをしない？」

「賭け？」

思いがけない言葉に俺はついオウム返しをしてしまい、真意を探るべく彼女の目を覗き込んだ。

……ダメだ、何もわからん。てか逆に見つめ返してくるからまともに目を見れん。

「まず君がガハマちゃんに何かを言ったことが前提なんだけど、それは同じ奉仕部だったんだから言ったってことでいいよね」

「ええ」

「じゃあそこで君がガハマちゃんに言ったことを当てるゲームをしよう。チャンスは一度きりで、合ってるか間違ってるかの判断は君に任せるってことで、どう？　後、勝った時の賞品は負けた相手に一つだけ言うことを聞いてもらえるとかね」

「そんなもん合っていても俺が違うと言えば俺の勝ちになりますよ？」

「それでも君はそんなことしないでしょ？」

一寸の迷いもない信頼。無条件の信頼は時として残酷に映るというが、この人のそれはむしろ脅迫に近い。

それに、なぜだか従いたくなってしまう。リスクリターンを考えたらここは嘘をついてでも俺の勝ちにしてしまえばいいのに。本当にこの人は、なんというか、恐ろしいな。

しかし、本当に恐ろしいのはここからだった。

「結論だけ言うと、比企谷君は告白させないようにしたんじゃない？」

胸がドキリと鳴る。顔には出していないつもりだが、雪ノ下さんは薄笑いを浮かべていた。

「あれだね。『卒業しても奉仕部の関係は続けていきたい』とか？　そしてその意図とは」

――雪乃ちゃんを、雪乃ちゃんの依存する居場所を守るため。

「……お見事ですね。当たりすぎていて怖いくらいです」

「私はなんでも見てるからね～」

嘘をつくことも忘れ、気付いた時にはすでに賞賛した後だった。それにしても、なぜ雪ノ下さんはこうも俺の言葉を予想出来たのだろうか。

「俺ってそんなにわかりやすいですか？」

「比企谷君は理屈で動くじゃない？　だから状況さえ把握してたらどんなことを言うかなんて意外と予想しやすいんだよ」

成る程と感心しつつ、しかしそれでもそんな芸当をやってのけるこ

とが出来るのは雪ノ下さんしかいないだろうとも思う。

「じゃ、何を聞いてもらおうかなー？」

「……なるべく思いやりを持った要求をお願いします」

「そうだね、それなら」

そこまで言って少し逡巡する雪ノ下さん。元から決めていたのか、それとも思いついたことを整理しているのか。どちらにせよ彼女の目は何を要求するか既に決まっているような目だった。

「私のこと、これから陽乃さんって呼ぶこと。良いね？」

瞬間、一際大きく桜が舞う。ふわりと舞った白の花弁は彼女を霞ませ、触れたら崩れてしまう弱々しくて脆いものへと変えた。美しすぎる光景は、時にこの世から無くしてでも否定したくなってしまう。

「……なぜですかね。なぜか春光呪詛が頭に浮かびましたよ」

「宮沢賢治？」

「ええ」

春光呪詛。状況は定かではないが、かつて宮沢賢治が残した詩の一つだ。その詩は明らかにある女性への想いを綴ったもので、しかしそれを嫌厭するかのように否定する言葉が並べられている。

『いったいそいつはなんのざまだ』

『どういふことかわかってゐるか』

どうしても否定したかった恋の詩。なぜ俺は彼女にそんなものを連想してしまったのだろう。

というより、なぜ俺はそれを伝えた？

「私も意外と好かれてるものなんだね」

「思い違いも甚だしいですよ」

「告白してくれたくせに、何を今更言ってるの？」

彼女の目はいつものからかうような目付きではなく、本気だと形容するのが最も的確だと思えるくらい落ち着いたものだった。

「……勘違いしてしまいますよ？」

そんな目をされたら、本当に。

「答え合わせの時までには、勘違いの定義を理解しておいてね？」

彼女に似つかわない、柔らかい笑顔を浮かべてそう言う。

「はいこれ、私の連絡先。立場上こういうのは携帯しとかなきゃダメなんだ」

そう言って俺の手の平を彼女の手の平で包む。くしゃりと音を立てた一枚の小さな紙は、彼女の手の温度と相まって確かに現実のものだと確信する。

「……近いうちに連絡しますよ。陽乃さん」

彼女の目はいつもの茶色で、頬は少しだけうす赤い。その意味を探そうとするが、今はまだ良いかと思い考えるのをやめる。

ただそれっきりのことだ。意味なんて探す方が無粋である。

2話

「ただいま……つっても、誰もいねえか」

両親は仕事、小町はまだ生徒会の仕事が終わらないようだ。一人で呟いた帰宅の合図は虚しく響き、やや乱雑に脱ぎ捨てた靴をそのままに部屋へと直行した。制服のままベッドにダイブすると、ポケットからくしゃっと音が鳴る。

「陽乃さん……ね」

静かにポケットの音源を取り出し、綺麗な字で書かれた文字列を眺めながら、思い出したかのようにスマホへその連絡先を登録する。雪ノ下の上に登録された〝雪ノ下陽乃〟を見て、なぜか言いようのない充足感を覚えた。

とりあえずメール作成画面に移り、ふと思い立って指を止める。

……。

あれ？　これ本当に連絡しても良いの？　冷静に考えてみたら俺からかわれてない？

今日の陽乃さんは平時とは明らかに違った。それは言葉を交わした俺が一番わかることだが、だからといってこの誘いに安直に乗っても良いのか？　連絡したら最後、『あれ？　もしかして本気にしちゃった？　ごめんねｗｗ』とか言われるかもしれない。というかこの思考すら読まれていそうで怖い。

「たっだいまー！　おかえり小町！　ただいまお兄ちゃん！」

「おわっ!?」

ゴトトン、とベットから落ちて割と大きな音をたてる。落ちた拍子

に手に持っていたスマホが部屋の隅へ飛んでいき、しかし画面が割れている様子はないので安堵する。

「大丈夫お兄ちゃん?!」

バタバタと階段を駆けてきて俺の部屋のドアを勢いよく開ける小町。靴は履いていないがカバンは持っているあたり、音に驚いて急いで駆けつけてくれたのだろう。

「ん、おお……。ちょっとびっくりしただけだ」
「怪我してない?」
「してねえよ」
「もぉ……、本当に勘弁してよね?　……あれ、スマホ飛んでいっちゃってる」

部屋に戻ろうとした時、隅にあるスマホに気付いた小町はそれを億劫そうにしながらも取りに行ってくれる。小町のこういうところは多分将来ダメ男をどんどん製造していくんだろうな。小町製ダメ男一号が言うんだから間違いない。ちなみに俺はもうベッドの上に寝転んでいる。

「はい」
「おう」

受け取ったスマホの画面は依然メール画面で、受信ボックスやらメッセージRなんて文字が横書きで書かれている。先程の陽乃さんへメールを送るかどうか悩んでいた画面とは異なり送らずに消したか既に送った後のもので……。

「マジかよ」

急いで送信ボックスを覗いてみると、既に陽乃さんへ空メールを送った後になっていた。ただこれは不幸中の幸いか。空メールを送るってなんか格好良くね？　別にあなたに興味はありませんけど、一応貰ったものには返しますよ的な。

そんなことをあれこれ考えていたのだが、そのせいで周囲の状況、具体的には小町が何をしているのか全く見えていなかった。

「え?!　お兄ちゃんって雪ノ下さんのお姉さんと連絡取ってるの!?とんでもないところにお姉ちゃん候補ってこと?!」

気付いたら小町は俺のスマホを覗き込んでおり、驚いた顔の手本みたいな表情をしていた。

「話が飛躍しすぎて大気圏抜けそうな勢いだな」

「いやー、でもあの人かあ……。お兄ちゃんの手には余りそうな気がしないでも……、いやでもなあ……」

勘違いだと伝えたはずなのに一人で話をどんどん展開していく。うんうん唸る小町はそれから少しして、パンと手を鳴らした。

「お兄ちゃんの恋愛はお兄ちゃんのものだよ！」

「投げんのかよ。てかそもそも恋愛じゃねえ」

「うんうん、そう言うのもお兄ちゃんの自由だからね」

「いいからはよ行け」

口で小町を部屋から追い出し、自身の部屋へ戻ったことを音で確認してからスマホを確認する。新着メールは無く、更新してみても受信する気配は無い。

それからは読みかけの本を読みつつ少ししてはスマホを確認する、まるで思春期の中学生男子のようなことをしていた。陽乃さんは思ったよりも俺を掻き乱しており、客観的に見て恥ずかしいことをし

ていることに気付いたのは二時間もしてからだった。

（返信来ねえなあ）

読了した本はすでに本棚へ片付けられており、やることもなくただただスマホをいじる時間。なぜ陽乃さんからの返信を待っているのか、というかそもそもこれに返信が来るのかなんて今考えるには遅すぎる疑問にぶち当たり静かに画面を閉じた。呼応するように俺も目を瞑り、ベッドの上で本格的に寝る体勢になる。

まどろみの中、瞼にたゆたう桜を見た気がした。奇妙なことに、その時の俺は風にさらわれる桜の花びらよりも桜の木自体を眺めていた。風が吹く度に自身の体を千切る桜は痛々しく、それを隠すように花弁を辺りに降らせる。この上ない本末転倒にどこか既視感を覚えながら、俺は眠りに落ちていった。

どれくらい経っただろうか。目を開けると部屋は暗く、スマホの放つ点滅する光だけがその周辺を照らしていた。スマホの画面を開くと、時刻は二十時半を示していた。寝てからおよそ五時間。久々の昼寝にしては寝すぎたなと軽い反省をし、あることに気付き画面をもう一度開く。

新着メール　1件

……来てんじゃねえか。急に心拍数上がったんだけど何これ心臓病？　それとも俺を殺すための陽乃さんの策略？

どちらにせよメールを見ない理由はなく、手紙のアイコンをタッチする。差出人はやはり陽乃さんで、件名は無題だった。

『空メールは予想外だったなあ。電話番号も知りたいから比企谷君がお風呂入り終わったらかけてきてね？』

と、メールの返信をなぜか電話でしろという旨のものだった。基本誰とも電話しない俺からするとハードルが高すぎて潜った方が遥か

に簡単なのだが、陽乃さんはこの後に続けた文によってハードルの下に剣山を突き立てたのだった。

『あ、ちなみに電話してこなかった場合は君が毎日お風呂に入らない不潔な人だって雪乃ちゃんにメールするからね』

何なのこの人？　しかもメールってあれだろ？　雪ノ下が吹聴する時周りにフォローさせないために文字として残しておくとかいう要は逃げ道潰してるんだよな？

正直出来れば電話なんてしたくない。こういう小さなところから俺の日常は崩れていく。それは高校の頃に経験したつもりであり、俺と陽乃さんの間に要らない縁が結ばれてしまうのは実に面倒なことだ。

……まあ、言われた通りに陽乃さんなんて呼んでいる今の俺の言葉だと説得力なんて皆無だがな。頭の片隅には確かに『電話をかける口実が出来た』とでも考えているのだろう。

実際のところ俺がどう考えているかなんて、俺にもわからない。

中断した思考は遅めの晩飯を食べ風呂に入った後、否応なしに向き合うハメになる。

鳴動するスマホ。初期設定であろう軽快な音楽は陽乃さんが早く出ろと言っているようで、恐る恐る先程登録した番号の着信に出る。

『遅くない？』

「むしろ風呂上がって部屋戻った瞬間にかけてきた早さにビビってますよ」

だが予想に反して俺は意外とスムーズに答えることが出来た。声の震えも無く、ましてスマホを持つ手が震えることも無かった。

『では問題。なぜ今私は比企谷君に電話をかけたのでしょうか？』

「突然すね……」

いきなり言われてすぐに返答出来ない。普通に答えるならば〝俺が電話をかけるのが遅かったから〟であるが、陽乃さんのことだ。わざわざそんなわかりきった答えを言わせるためにこんな問題を出すわけがない。

数秒考えた末、俺は冗談交じりに口を開いた。

「俺をデートに誘うため、とかすかね」

『ふっ』

確かに確率は一パーセントに満たないとは思ってたよ？　けど鼻で笑うのはダメだろ。ぼっちのメンタルの強さを過大評価しすぎだ、彼女は。

『もしかしてデートしたかった？』

「まさか。陽乃さんと平塚先生なら迷わずひらつ……すんませんなんでもないです」

『これは静ちゃんに報告だね』

「いくら積んだら勘弁して貰えますか？」

平塚先生のことを考えると体が震えてドキドキが止まらなくなるんです。何これ恋？　もしかして俺アラサーに恋しちゃったのか？

そんなくだらない妄想は背中をつたる一筋の冷や汗によって否定される。あの人は性格をどうにかしたら良いのにな。まああの人の一番格好良いところも性格によるものなんだけど。つまり平塚先生は結婚出来ない。ＱＥＤ。

『なら明日お花見行こっか。私大学の子とそういうの行くの本当に嫌いだからさ』

いつもの調子でキツいことを言う陽乃さんは普段と同じように見

えた（この場合は〝聞こえた〟が近いか）。それを本心から言っていると確信するに充分な彼女の声色は温度が全く宿っていなかった。

「俺も人混みは嫌いですよ」

『この後静ちゃんに電話する用事があるんだけどさ』

「喜んで同行させてもらいます」

見た目は嫌々ついていく流れの俺だが、正直なところ俺は少しだけ楽しみにしていた。むしろ陽乃さんがなら来なくて良いやと言ったなら、どうにかして俺もついていくために食い下がっただろう。

それほど俺は彼女に、もっと言えば彼女の放つ異様な香りに惹かれていた。普通の人では感じさせてくれないような、特別の象徴のような、そんな香り。

『じゃあ明日の午後六時に今日出会った場所でね！　じゃあおやすみ、比企谷君』

「わかりました。おやすみなさい」

耳を離してから彼女が切るのを待つ。三秒ほどでその通話は途切れ、一気に静寂が場を支配する。先程久々に誰かと夜通話したせいだろうか。いやに冷たい無音は俺に早く寝ろと催促してくるようだった。

午後五時十五分。俺は家を出ていた。家から昨日出会った場所まではおよそ十五分ほどであり、万に一つも待たせられないなと直感的に判断した俺は早足で向かっていた。

なぜかあの人の前だと格好つけたくなるんだよな。服装はいつものように小町に見立ててもらったものだが、こういう俺自身の努力によって変わる行動面くらいはしっかりしたい。陽乃さんは本当に飄々としており、いつ俺から興味が失われるかわからない。

……昨日陽乃さんは告白されたつってたけど、実際本当に俺はあの人に好意を抱いているのかもな。なんて、軽い冗談を一人考えながら目的地へ到着する。五時半手前ほどの時間で陽乃さんはまだ来ていなかった。

『髪がくろくてながく』

『しんとくちをつぐむ』

『ただそれっきりのことだ』

春光呪詛のこのフレーズなんて、どちらかと言うと雪ノ下の方が近いのにな。奉仕部の部室の窓辺で紅茶を飲む姿なんかはまさにこの一節に合致する。

だがあいつを見てこれを連想することは無かった。そこに意味があるのかどうかは、今のところ検討もつかない。

それから十分程経つと、彼女は気まぐれに現れた。なぜそんな表現をしたか、それは彼女を見た瞬間本当にふと感じたものだったからだ。

「や、比企谷君。お待たせ～」

「別に待ってないんで」

「んん、それは不合格かな？　ありきたり過ぎてなんか嫌」

昨日とは少し違い、陽乃さんは俺が知っていたいつもの陽乃さんだった。ホワイトワンピースに黒のカーディガン、後はルージュのベレー帽を着ており、地味めな俺の服装だと隣に立って歩くのは気後れするほどだ。

「花見って、この橋の上から見るんですか」

「いや、近くに桜並木があるんだよ。病院の近くなんだけど、知らない？」

「病院はわかりますけど、桜並木は知りませんね」

「じゃあ確認しに行こっか！　レッツゴー！」

そう言って腕を組む陽乃さん。無論組まれた腕は俺の腕であり、時折胸が当たる度に顔をひくつかせた。しかし俺は大袈裟に腕を払うことも、胸が当たっていると言うこともせずそのまま連れられるままに歩く。

その行動が意外だったのか、陽乃さんは歩いている途中黙ったまま俺の顔を覗き込んだりした。だが覗き込むだけなので何かを言ったり、まして腕組みをやめることはせず目的地へと順調に進んでいた。

それから数分、橋の上のものとはまだ違う桜模様が見えてきた。綺麗に舗装された道を桜が囲むようにして連なっている。横幅の広いそこは散歩道としては最高のロケーションであり、病院が近いからか車椅子を押される人もちらほら見える。

「ここ良いのがさ、大学生とかいないじゃん？　何ていうか、パリピ的な？」

「確かにこんなとこにそういう輩は来にくいでしょうね」

車の音と桜の木が揺れる音、それに静かな談笑の音に駆け回る子どもの音。どれも花見スポットでは聴くことがないものばかりだ。そういうところは大体がやがやとした話し声で埋め尽くされている。

「良い感じですね」

「そうだね～」

組まれた腕は徐々に下がり、お互いの手の平が触れ合う。不意に絡めてきた指を俺は抵抗することなく、彼女の温度を受け止めた。

「ありゃ、これでも動揺しない。君も成長したんだねぇ」

「……こんなこと誰にでもしてたら勘違いするやつが続出しますよ」

「言わせたいの？　意外と嫉妬深いんだ」

「別に告白した覚えはありませんよ。陽乃さんが勝手に勘違いしただけで」

「なんか手繋ぎながらファーストネームで呼ばれるとドキッとするね。子どもだと思ってたのに、知らない間に大人になってるんだなー」

一々思考を必要とさせる陽乃さんの言葉は驚く程すっと胸に染み込んでくる。それにしても、最後の言葉。あれは一体どちらに向けて言った言葉なのだろうな。もしくはどちらにも向けて言ったのかもしれないが。

並木道をゆっくり歩きながら、彼女はおもむろに口を開いた。

「もしも比企谷君の好きな人が死んだらどうする？」

「そりゃ葬式でしょ」

「誤魔化さない」

握られる手の力が少し強くなる。別におかしなことは言ってないんだがな。

「俺のですよ」

ふと思いついてそう言ってみる。春光呪詛がわかるんだ、これも理解してくれるんじゃないかと少し期待した。

「好きかもしれないけど、別に愛する人とは言ってないよ？　それとも好きになることはイコールで愛するって方程式が成り立ってるの？」

「……流石ですね、本当に」

春日狂想。中原中也の詩で、愛する者が死んだらという酷く残酷な命題について詠まれたものだ。曰く愛するものが死んだならば自分も死ぬべきであり、それでも死ななかったら奉仕の心になるべきだ。

死ぬほど愛する人が居なくなるのに生き長らえてしまう。これほ

どの地獄は恐らくこの世のどこを探しても見つからないだろう。
「でもさ、死んだ後のことを考えたら今死んでも同じだと思わない？」
「というと？」
「Ｉ，ｍ　ｎｏｗ　ｈｅｒｅとＩ，ｍ　ｎｏ　ｗｈｅｒｅは本質的には同じってこと」

前者は『私は今ここにいる』。後者は『私はどこにもいない』。背反する言葉をなぜ同じと言ったのか、少し考えれば出そうな気がしたが、言葉にはしなかった。体の中に留めておくから意味があり、それを口に出すと陳腐になり得るのが怖かったからだ。

「俺が死ぬのなら人生最高の瞬間で死んでみたいですけど、まあそうは行かないでしょうね」
「比企谷君もそんなこと考えるんだ。……あ、いや中学生の時に腐るほど考えてるか」
「そんなことより陽乃さん」
「露骨に話を変えるね～。何？」

別に中二の頃の話をされるのが嫌なわけじゃない。本当だからな？　いやマジで。

「陽乃さん俺にファーストネームで呼ばせる割に、俺のことは苗字で呼ぶんすね」

八幡と呼んでほしいと言っているようにも聞こえるその発言は、陽乃さんにはどう聞こえたのか。握る手はまだ暖かく、時折見せる温度の無い彼女とは切り離れているように思えた。

「呼んで欲しいんなら私に認められなきゃ。ね？」

パッと握っていた手を離し、俺の目の前に立って満面の笑みで笑う。仮面のない彼女の笑顔は少し意地の悪そうな、だがとても感情の伝わる笑顔だった。

彼女の上を待つ空を見上げると、もうすでに暗くなりかけていた。太陽の沈む方向を見ると、そこは赤と言うには赤すぎる、恐ろしい色をしていた。

「すごいね。小説だったら燃えるような空とか表現するのかな？」

「いや、あれは血でしょ」

なぜそう答えたのかはわからない。しかし推敲する前に口をついており、遅れて陽乃さんの表情を伺う。

――目を大きな丸にし、しかし口元は笑っていた。その時の心に浮かんだ『予想外』という驚愕は、恐らくどちらの心にもあったのだろう。

「今のは良かったよ、比企谷君」

だがそれでも、彼女は俺のことを名前で呼ばなかった。

3話

大学生活が始まり早一週間。三日ほどかかった全体のオリエンテーションも終わり、本格的な授業が始まって二日経った。九十分授業というものは五十分で慣らされた十二年間のせいかとても長く感じ、スマホで時間を確認して辟易するのがいつもの流れになっている。

大教室の中、俺は真ん中よりも少し黒板よりの方の席へ座っていた。三人がけの席の左を陣取っており、真ん中の席に鞄を置いている。ちらほらとぎこちない会話を耳にしながら、これは大学生活でもぼっちだなあと一人黄昏れる。まあ大学は高校ほど人付き合いが重要にはならないだろうと勝手に考えているあたり、端から俺は友人など作る気もないんだろう。授業開始まではあと八分。少し早く着き過ぎたと反省する。

そんな折、全く予期していないことが起こった。

「あ、あの！　ここ空いていますか？」

三人がけの右側に立って俺へと声をかける。突然の事で、俺は何も言えずに本当に俺に言っているのか確認するため辺りを見渡した。

「あ、すいません……」

それが友人を探す仕草に見えたのか、気弱そうな女は残念そうにその場を離れようとした。そこを引き留めることが出来たのは、高校の頃に成長出来ていたからだろうか。

「え、はい……？」

「いやここ、空いてます」

「……あ！　すみません、わたし勘違いして……」

わかりやすく落ち込む女。白地の英字が書かれたTシャツに紺色のミモレ丈のスカートを履いており、清潔感はある。ただ先の行動にもわかる通り、出会ったばかりなのに自信の無さが透けて見える。

「いや、俺も悪いんで」

「は、はぁ……」

俺が真ん中に置いた鞄をどけると、遠慮がちにその女は座ってきた。

俺の隣、すなわち三人がけの席の真ん中に。

「……すいません、そこ荷物置く場所じゃ……」

「……っっ!? ご、ごめんなさい!! そうですよね！ わたしもおかしいとは思ってたんですよ！ 本当にすみません!!」

すぐさまそこを飛び退き、慌てて右端の席に座る。顔を赤くしながら「ですよね、ですよね！」と小声でぶつぶつ言いながら手で顔を仰ぐ姿はまるで女版ぼっち、言ってみたら俺が女になったようなキョドり具合だった。

その後すぐにチャイムが鳴り授業が始まる。授業中の間話すことは無かったが、時たま刺さる右側からの視線は少し鬱陶しく感じた。

「あの……」

懲りずに話しかけてきたのは、授業開始から八十分、と言っても授業自体はもう終わっており、身支度をして帰ろうとした矢先だった。

「どうしました？」

ここで一つ補足だが、なぜ俺がずっと敬語なのかと言うと相手が年

上の可能性があるからだ。浪人生や落単して留年といった歳が違うのに同じ学年ということもあるため、一年しかいない必修の授業でも話しかけられたら基本は敬語を使うことにしている。

「あ、あの……。……お昼ご飯、もし良かったら一緒に食べませんか……？」

「え、あ、いや……」

「そ、そうですよね！　急にごめんなさい！」

言い淀むとそれをすぐに拒絶と勘違いしてまくし立てる。本当は俺が異性に慣れていないせいです。まして初対面の相手なんか、レベル違いもいいところである。

「いや、まあお邪魔でなければ」

普段断るであろう俺がそれを了承した理由は、ひとえにこの女に同情したからである。友人を作りたがっている点で俺とは異なるが、ぼっちは基本ぼっちに優しいのだ。そんなところで同族嫌悪してしまってはただでさえ絶滅危惧種なのにさらに絶滅が加速してしまう。まあ消えたところでまた新たに出てくるんだろうけど。働きアリもいれば、ってやつだな。

「あ、な、なら購買に行きましょう！　場所はその後……」

「俺弁当持ってるし先に場所取ってくるわ。その後連絡……いやすまん。流石に早いな」

ちなみに弁当は小町お手製である。毎日これを食べに大学へ来ていると言っても過言ではない。

「いえ、いえ！　もし良かったら交換……、お願いできますか？」

涙目にも見える表情で俺の顔を覗き込む。何これこいつ本当にぼっち？　こんな表情出来るくせにぼっちとか周りのやつは何をしてんの？

（……いや、まあこの性格だしな）

一人で勝手にぼっちの理由を決めつけながら、ポケットに入ったスマホを取り出す。それを渡すと相手は驚いてあたふたしていたが、少しするとロックのかかっていないことに気付きぎこちない手付きで入力した。チラリと見えたこの女の連絡先の数は、本当に数える程しかなかった。

「は、はい！　出来ました！」

「ん」

というか俺結構受け答え出来てるよな。これってあれか？　緊張している時にそれ以上緊張しているやつを見ると逆に冷静になる的な。

「と、それでですね……。実はわたしもお弁当持ってきてて……」

「あ、そう。なら移動するか」

「は、はいっ」

先んじて歩き出すと、少し遅れてこいつもついてくる。教室を出ると思った以上の人間がわらわらとたむろしていたが、視線を気にせず外へ出ていった。

春の陽気は肌に優しく、太陽の下で飯を食おうが暑いと感じることはない。むしろ気持ちの良い気温で、外に設置された木組みの机と椅子に向かい合って俺達は座っていた。

小町弁当を開けると、中はオーソドックスなものだったが１０割増で美味しそうに見えた。なんてったって小町の作った弁当だからな。

ダンボールが入っていても美味しく食える自信がある。

「あ、綺麗なお弁当……」

意図せず呟いたのか、言ってからハッとして口を塞いだ。何その動きあざとくない？　まあ指摘はしねえけど。

「そりゃ小町が作ったもんだからな」

「あ、彼女さん……」

「妹だ」

ちなみに彼女にしたいと考えたことは無い。嫁ならあるけど……いや入籍って形式に拘らなければ行けるんじゃないか？　何だかんだ言って小町も面倒見てくれそうだしなあ。千葉の兄妹ならそれくらい嗜みレベルだろうし。

なんて一人で妄想していると、俺が呼ばれていることに気付いた。

「あ、あの！」

「ん、ああすまん。なんだ？」

「この連絡先の名前って、何て読むんですか？　ひ、ひき……、やわた？」

自身のスマホの連絡先画面を表示して俺に見せる。比企谷八幡。確かに初見で正しく読まれた覚えがないな。

「ひきがやはちまん。比企谷でいい」

「ひきがやはちまんさん……。はい！　では、比企谷さん！　わたしのことは鶴岡でいいです」

スマホに登録された画面を確認すると、どうやら苗字が鶴岡らしい。縁起の良い苗字だなと考えつつ、よろしくとだけ言っておいた。

それからはたまに会話をしたりするだけの、ただの昼食の時間が過ぎた。元々どちらも（といっても鶴岡がぼっちかどうか言質は取っていないが）人と殆ど話さない質のため、これが当たり前と言えば当たり前である。

「あの」

こういった具合に、時たま話す時の会話の始まりは大体こいつからだ。

「サークルとかって決めましたか？」

「いや、まだ何にも」

もっと言えば入るつもりすらない。しかしそれを言うと会話が終わってしまうため口には出さない。

「そうですか。……もし良ければですけど、一つ一緒について来てくれませんか？」

曰く、幼馴染みの女の先輩が入っているサークルの新入生歓迎会に一度来てくれないかと頼まれたとのことらしい。サークル自体はバドミントンサークルだが初心者の集まりのような緩いもので、これまで何もしていなかったやつにとったら取っ付きやすいグループというわけだ。

「ん……」

ただ面倒臭い。非常に面倒臭い。日付はおろか時間すら聞いていないが、俺の中では既に断る理由を考えたいた。

しかし神様はそんな俺を見透かしたのか、乗り越えられないような試練を課してきた。

「あ、鶴ちゃん！」

長い茶髪でストレートの、いかにも大学生といった風貌の女が駆け寄ってくる。鶴ちゃんと言うように、どうやら鶴岡の知り合いらしい。

「鶴ちゃん友達出来たんだ～。てことはこの子も一緒に？」
「う、うん。そのつもり。今日の夕方からだよね？」
「そ。今日の十九時から二時間、大学近くの飲み放題で！　じゃ、あたしは行くから！」
「あ、おい……」

俺の呼び止める声などまるで聞こえていないかのように（実際聞こえていなかったのかもしれないが）、先輩と思しき女は去っていった。てか鶴岡も何勝手に承諾してるんだよ。ぼっちはぼっちらしくぼっちのためにぼっちを汲んでやるもんじゃねえの？　ぼっちを笑うやつはぼっちに泣くぞ。

「……良い？」
「おう……、いや待て」

先程の上目遣いパート2で俺に問う。これずるくない？　お互い椅子に座ってんのに上目遣いとか結構な技術じゃねえの？　一色辺りなら難なくこなせそうだが。

……陽乃さんも出来そうだが、あの人は上目遣いというより下目遣いだな。そもそものステージが俺と違うし、俺の場所よりも下に降りて見上げるよりもその場所から見下ろす方が楽そうだ。

「あ、やっぱりダメだったかな……？」

髪の毛をくるくるしながら俺ではないどこかを向く。視線の先は恐らく地面で、この下向き加減が鶴岡の自信の無さ加減を助長しているようだった。

「……ま、今回は行く。だが次似たようなのがあっても行かねえぞ。てか勝手に決めんのは俺以外でもしない方が良いだろ」

「あ、うん！　……その、ごめんなさい」

卑屈加減がいい加減鬱陶しくなるが、それをこの場で注意する気は無い。俺だって『その気持ち悪い笑い方やめて』とか言われても、直すことなんて土台無理な話だ。つまるところ、ぼっちの間に培われた癖は一朝一夕で直るようなものではない。

その後は取っている授業が異なるため別れ、次に合流したのは十八時半の正門前だった。日はまだ暮れず、しかし空はオレンジ色に染まっていた。夕方の中の鶴岡は元々の雰囲気も相まってなぜか幻想的に見えた。

ただ、〝なぜか〟とあるように鶴岡にその感想は少し大仰だとも感じている。そういった壮大なオーラを纏えるのは俺が出会った中だと雪ノ下姉妹くらいか。少なくとも自分に自信が無い鶴岡には勿体無い言葉だ。今日会った相手に随分失礼な評価だな、というのはさておき。

「あの集団に付いて行けばいいのか？」

「うん。あ、ほらさっき会った女の子前にいるでしょ？」

見ると、確かに前の方でチャラそうな男女グループと話していた。そのグループがその女に対して敬語を使っているのを見る辺り、あそこも一年なのだろう。出会って数日で男女グループとか正気の沙汰じゃないな。いやグループ作るのすら俺には到底真似出来ない芸当だが。

そのまま後をついて行くこと五分強、目的の店に着いたのか皆ぞろぞろと中へ入っていった。進みが急激に遅くなったのは中で金の徴収をしているからだろう。

「はい、じゃあ一人三千円ね。あとこのガムテにカタカナで名前書いて」

え、三千円？　サイゼの某洋風ドリア十個分？　とんでもないカルチャーショックに動きを止めていると、隣にいた鶴岡は何の迷いも無く千円札三枚を先輩らしき人に手渡しガムテープにツルオカと書いた。

仕方なく俺も財布から三千円を渡してガムテープにヒキガヤと書くと、それを確認した先輩は奥の座敷ねと俺達を促した。

「なあ、これの相場ってこんなもんなのか？」

「わたしも驚いたけど、多分そうだよ。飲み放題だからそれくらいなんじゃない？」

成る程。ただそれでも酒を飲めない俺達にとってはかなりの損だよな。言おうと思ったが座敷の向こうの状況を見て二の句が継げなくなっていた。

茶髪金髪は当たり前、中にはグラデーションになっている面白頭まで蔓延る阿鼻叫喚。まだ素面だというのにかなりのテンションでがやがやと会話をしていた。俺達の後ろに並んでいた人を含めると、総勢約六十人程度か。これが多いのか少ないのかはわからないが、取り敢えずこのサークルには二度と顔を出さないんだろうと決意した瞬間であった。

全員分の金を回収し終えたのか先程の先輩は大部屋に入るなりふすまを閉め、パンパンと二度手を叩いた。

「今日は新入生歓迎会に来てくれてありがとう！　飲み物とかお酒は適当に頼んでいくし、飲みたい人はじゃんじゃん飲んでね！　それじゃあみんな騒いでいこう！」

といった具合に音頭を取り、全員に飲み物が行き渡ってからは再度乾杯の挨拶をしてグラスを鳴らす。俺も前に注がれた飲み物を控えめに掲げ、隣にいた鶴岡と小さく音を立てた。

「か、乾杯……？」
「お、おう……」

またも出てくるあざと行動に一瞬ドキッとし、それを忘れようとするかのごとくグラスをグイッと傾ける。瞬間飲み慣れない苦い味がし、顔に少し熱が帯びて――

「んぶっ、これ酒じゃねえか」

少し吐き出してしまう。幸い飛沫となって出たため大きな被害はないが、隣の鶴岡はそれに驚いてむせてしまったようだ。

「すまん、大丈夫か？」
「うん、平気平気……。あ、私のはただのお茶だし、良かったらどうぞ？」
「助かる」
「あっ……」

渡されるまま手に取り少量を喉へ流す。今度はちゃんと飲んだことのある烏龍茶であり、少し落ち着くことが出来た。

「すまん」
「あ……、いや、えっと……」

返されたグラスを手に取るが、それをテーブルに置こうともせず何度も宙で動かしている。何をそんなに意識しているのだろうか。

「……あ」

間接キスか。気付いた時にはもうやらかした後で、もしかしたら今のは鶴岡なりの冗談だったのかと考えると本当に申し訳ないことをした。

「それ貰えるか？　この際だから全部飲む」

「いやいやいや、大丈夫だから！　ホント気にしないで良いから、ね？」

そう言って鶴岡は半ば強引にグラスの烏龍茶を全て飲み干し、赤い顔でえへへと笑う。素でやってんのか知らんが、本当にあざといなあ……。どこぞの後輩を思い出すわ。

「お、これもう女の子酔ってんじゃん？　君が飲ませたの？　やるね～。ほら、君……えっと、ヒキガヤ君もささ！」

急に乱入してきた男が突然机に置いていたグラスを俺に差し出し、飲むように指示する。相手のガムテに大きく3と書かれているあたり、恐らく三年生なのだろう。拒むに拒めず俺はそのグラスを受け入れ、三回ほどに分けて飲み干した。

一応鶴岡にアルコールが入っていないことは黙っておいた。その方が後々面倒なことにならないだろうと考えたためである。

「じゃあ俺も！」

一度席へ戻ったと思うとジョッキに注がれたビールを一気に飲み

干し、みるみるうちに顔が赤くなっていった。そこでようやくこのサークルはそういうやつなのだと理解した。初めてのサークルの新歓でそういう地雷があることに気付けてラッキーと思うのか、そもそも地雷を踏んでしまったことに項垂れるのか。ペシミスト気質な俺は恐らく後者の感想を抱いたことだろう。

「ねえねえヒキガヤ君！　君彼女はいるの？」

肩を組んでそう訊いてくる。鼻につくアルコールの香りによって顔を顰めさせられる。

「いや」

「え、マジ？　この子彼女じゃないんだ？　てかヒキガヤ君格好良いのにね～。ね？　えぇっと……ツルオカちゃん！」

「え?!　は、はい！」

鶴岡よ。そんなところで同調してしまうと後で何を言われるかわかったもんじゃないぞ。と鶴岡が標的にされることを恐れていたのだが矛先は未だ俺から変わる気配はなかった。

「ちょ、スマホ貸して。着歴調べるわ。女の子いたらかけるからねー」

「は、ちょっとそれは」

「おお！　いるじゃんしかも先週！　これはハルノって読むのかな？　とりあえずかけんべ！」

俺の静止も虚しく、先輩は電話をかける。時間的にはまだ七時半そこらなので心配していないが、それでも緊張してしまうのは不可抗力というものだろう。

『もしもし？　比企谷君からかけてくるなんて珍しいね～。大学にはもう慣れた？』

未だ肩を組んでいるため会話は筒抜けになる。しかし周りの喧騒によりちょうど鶴岡には聞こえないくらいの音量だ。

「あ、もしもし？　今比企谷君と話してたらお友達を呼びたくなっちゃったらしくてさー。もし良かったら来てくんない？」

向こうの事情は一切考慮せず、この場所をぺらぺらと言って切ろうとする。しかしその直前陽乃さんは待ったをかけた。

『丁度近くにいるし合流するよ。あと十分くらいで着きそう』

それだけ言って通話を切る。先輩はにやにやとし、鶴岡は困惑している様子だった。

「ヒキガヤ君。今話してた子って可愛い？」

鶴岡も気になるのか少しだけ聞き耳を立てているようで、とりあえずは本当のことを話した。

「ええ。可愛いというよりかは綺麗と言った方が正しいかもしれませんが」

「お、それマジ？　彼女じゃないんなら狙っちゃっても良い？」

「……」

「ヒキガヤ君？」

その瞬間、予想出来てしまった面倒な事態に頭痛を覚えた。場合によれば俺まで孤立することになるな。まあこのサークルには金輪際来ねえからどうでも良いけど。

問題は鶴岡だ。俺と一緒に来ている手前どうしても変な目で見られてしまうかもしれない。一応そのことを伝えておこうかと思った

が、鶴岡は鶴岡で居心地の悪そうな顔をしていたため言うのをやめる。入りたくないのであれば一々言う必要も無い。

「相手に出来るのであれば」

その言葉にはある種の自負も存在していたのかもしれない。俺の方がお前よりも陽乃さんに相手にしてもらえる。そもそもお前のような人種が陽乃さんの眼鏡にかなうわけがない。そんな浅はかな自慢を胸中で渦巻かせていると、それから本当に十分ほどで閉じられていたふすまが大きな音を立てて開いた。

「この中に比企谷君はいる？」

喧騒は一瞬にして止み、陽乃さんは視線を一点に集めた。しかし物怖じするどころか薄笑いを浮かべ、俺を見つけた彼女はつかつかとこちらへ歩いてきた。ざわめきは取り戻したものの、依然静かな場はこちらへと意識が集中していた。

「で、私を呼んだのは誰」

温度の無い、というよりは意図的に下げられたのか。冷たい視線は俺の隣を陣取っていた件の先輩へと注がれる。

「キミ？」

「そ、そう！　盛り上がるかなー、って思ってさ。まさかこんな綺麗な人だとは……」

「帰るよ、比企谷君」

「は？」

今の言葉は誰のものだったのだろう。俺のかもしれないし、先輩のかもしれない。ただ一つ確かなことは、突拍子もない提案に周りは最

初意味を汲み取れなかった。

「こんなところにいたら君の良さが無くなっちゃうよ。個は個でいないと」

「ぼっちを強要するとか、酷い人ですね」

「その痛みには慣れてるくせに」

立ち上がり俺の手を引く。慌てて俺もカバンを手に取ると、陽乃さんはもう一度だけ一同の方へ向かって。

「群れる相手は考えてあげてね？」

それだけ言い残して大部屋を出る。シンと静まり返った部屋の、最後に見た鶴岡は酷く悲しそうに見えた。

外に出るともう既に夜は訪れていた。先程までのオレンジ色が嘘のようだ。

「なんであんなことしたんすか」

もうあのサークルには行けないじゃないですか。ここまで言わずとも汲み取ってくれる陽乃さんは、話していて楽でもあり面倒臭くもある。会話というものは自分が出来るレベルを相手にも求める傾向があるからだ。

「君には私だけで充分だよ」

手は引かれたまま、少しだけ握る力が強くなる。陽乃さんが前を歩いているので顔は見えないが、不思議と感情が伝わるようだった。

「雪乃ちゃんには悪いんだけど、私本格的に君を気に入っちゃったみたい」

歩幅を大きくして陽乃さんの隣に辿り着く。真顔でそう言う彼女には少しの狂気さえ見えるようだった。

「好きとは言ってくれないんすね」

対して俺に出来る反撃と言えばこれくらいで、しかしその時に限って俺は陽乃さんの顔を見ていなかった。

「烏滸がましい」

そんな風に俺をあしらいながらも、手は繋いだまま。何度か手を繋いだことはあるが、何度手を繋いでも慣れない。それはひとえに俺の女性経験の不足によるものなのか、それとも。

彼女の態度とは裏腹に指を絡めてくる。だがなぜかその変化により かえって冷静になり、そしてあることに気付いた。

「……すいません、定期落としてるっぽいです」

不思議と焦りは感じていなかったが、申し訳なさは感じていた。今更あの場に戻るわけにも行かず、鶴岡にその旨をメールしてスマホをポケットに戻す。大学で落としたのなら落し物センターにでも届けられているだろう。

「ならさ、うち来る?」

さも当然のことのように、陽乃さんはそう提案する。行った後のこと、つまり両親にどう説明するかなど断らなければならない理由は枚挙に暇がない。

しかし、その時の俺は酔っていたからだろうか。理性の化物と呼ばれた俺は完全に理性を捨てていた。

「喜んで」

4話

午後八時というのは不思議で、外の人の数は意外と少ない。曜日にも依るのだろうが、週頭である今日だとがやがやとした不快な喧騒は形を潜めている。

しかし今の俺の胸中はそんな穏やかなものではなかった。

（冷静に考えたら俺ヤバくね？　これご両親にどう説明すんの？　まして俺ままのんには顔バレしてたよな？）

全身から吹き出す汗は夜風によって気化し、どんどん熱を奪われていく。視線がキョロキョロと忙しなく動くが、それで問題が解決するわけでもない。

「比企谷君、どうしたの？」

流石に不審に思ったのか、陽乃さんは俺の顔を覗き込んだ。

「やっぱ俺帰りますね」

「え、なんで」

「男が女の家に上がり込むってのはやっぱダメだと思うんですよ。倫理的に、そう倫理的に」

「本音は？」

「ままのんこわい」

手汗によって陽乃さんと手を繋いでいたことを思い出す。流石にこのままはマズイと思い手を離そうとすると、陽乃さんの方からぎゅっと握られる。

「私一人暮らしだよ？」

「あ、なら大丈夫です」

倫理的な問題は丸めてゴミ箱へ捨てちゃおう。今はこの人ともっと長く一緒にいたい。ベタ惚れ丸わかりの思考を自覚しながら、連れられるまま歩く。

十分程だろう。俺と陽乃さんは道中ずっと手を繋いだまま歩き、七階建てのアパートへ到着した。見た目は白を基調とした至ってオーソドックスなもので、外から見える部屋の広さは学生マンションに比べてやや広めである。

陽乃さんの部屋は最上階の七階らしく、静かなエレベーターによって上へと運ばれていく。着いた先の通路を左に曲がった奥のところ、七〇七号室が陽乃さんの部屋だ。

「ここですか？」

「そ。七〇七、私の誕生日」

手慣れた手つきで解錠し、ガチャリとドアを開ける。ドアを上から抑え、陽乃さんに先に入ってもらう。小さくありがとうと言った彼女は腕をくぐって中へ入っていった。

「ただいまー」

「お邪魔します」

陽乃さんが先んじてリビングの方へ向かい、電気を付けていく。促されて中へ入ると、学生にはおよそ似合わないような部屋だった。ベランダに繋がる大窓は広い範囲を占め、部屋の左に設置されたテレビは馬鹿でかい。右隅にはチェストがあり、その上には小さな観葉植物が三つほど並んでいた。

「……なんかＯＬの部屋みたいすね」

「何それ、反応に困る」

「大人びてるって意味ですよ」

大きなテレビからテーブルを挟んだ向かい側にあるソファ（やはりこれも大きい）に陽乃さんは座り、左隣をポンポンと叩く。断る理由もないので拳二つ分ほど距離を開け座った。そばに寄ると彼女の甘い匂いが漂ってくる。

「それにしてもさ、今日はなんであんなところ行ってたの？」

「隣に女がいたのは覚えてますか？　あいつについて来てくれって言われたんで、その成り行きで」

「ふーん」

それ以上はその話題に興味を示さず、少しの間だが無音が流れた。

「……陽乃さんって何か香水でもつけてるんですか？　たまにめちゃくちゃ良い匂いしますよね」

「ホント？　君こういう匂いが好きなんだ」

肩口の方を自身の鼻に近付け、クンクンと鼻を鳴らす。その仕草を見て思わずエロいと感じたのは、恐らく不可抗力だろう。露出なんかは一切増えていないのに、不思議なものだ。

「何の匂いですか？」

何気なく投げかけたその質問は、しかし俺の予想とは大きく違った返答を生み出した。

「じゃあ嗅いで見る？　はい」

両手を少し広げ、抱き締められる姿勢を作る。滲み出る唾液をバレないように飲み込み、硬直して動けなくなる。

「どうしたの？　……やっぱりそういうことは出来ない？」

いたずらっぽい笑顔を浮かべて俺を挑発する。

「良いんですか？　マジで嗅ぎますからね？」

「君なら良いよ。さ、どうぞ」

再度腕を広げる。その瞬間、やはり初めこそ躊躇ってしまったが抑える理性を無視して彼女の体を抱き締める。右手は陽乃さんの頭を包み込み、左手は腰へと手をやった。

「んっ……、ホントにしちゃうんだ」

不意に漏れたであろう吐息は艶っぽく、そして確かに性を意識させた。

どこもかしこも柔らかい彼女の体はいつまででも抱き締めていられそうだ。彼女も何も言わず体を預け、加速している俺の鼓動が伝わっていないかだけ心配しながら陽乃さんを感じていた。

「……比企谷君？　お姉さんをぎゅってしてくれるのは嬉しいんだけど、趣旨忘れてない？」

「ん？　……ああいや、忘れておりませんのことよ？　別にフニフニの実のフニフ人間とか考えてませんよ？」

「……まあ何でもいいや」

完全に忘れていた目的を確認され、鼻の近くにあったうなじに顔を近付ける。深呼吸の要領で息を深く吸い、長く吐く。

「んんっ!?　……ちょ、それダメ。そこダメだから」

「なんかあれですね。やっぱりめちゃくちゃ良い匂いですけど、

ちょっとだけ酸っぱい。具体的には汗」
「は、はぁ?! 何言ってんの!? 別に臭くなんかないからね!!」
「いやいや、誰も臭いとか言ってませんよ。それも良い匂いの内です」

そう言ってもう一度深く息を吸う。鼻腔をくすぐる甘い香りは脳が溶けるような錯覚さえ覚えた。

「やっ!! ……もう終わり、終わり! お風呂入ってくる!」

俺を突き放し、風呂の方へと早足で歩いていく。普段見ることのない彼女はただの女性のようで、しかしこの思考こそが陽乃さんは普通の女ではないと裏付ける根拠にもなっていた。

しかし、まあ。

「……この匂いじゃないんだよな」

初めて橋の上で彼女ならざる陽乃さんを見た時。あの日香った蠱惑的で何時まででも嗅いでいたいようなあの香りは、ついぞ感じ取ることはなかった。

「お風呂上がったよー、エロ谷君」
「名前にエロを付けていいのは江口とかその辺の名字だけでしょう」

これで下の名前が拓也とかだとエロタクとか呼ばれるんだろうな。実に不名誉な渾名である。

湯上りの陽乃さんは上下無地の白いタンクトップとモコモコしたホットパンツを着ていた。先程よりも数段増えた露出に思わず目が釣られてしまい、そこであることに気付いた。

（……胸の先端に突起？　巨乳は寝る時はしないって聞いたことはあるが、それにしても……？）

確認のため、そう確認のためにもう一度陽乃さんの胸部に目をやるが、やはりそれは見間違えではなかった。

だが流石に見過ぎたのか、陽乃さんは俺の視線に気付き自身の胸へと目をやった。

「……やっぱりエロ谷君だね。まあこれは私も悪いけど」

「しょうがないですよ。この世には万乳引力ってもんがあってですね」

「乳首に釣られたくせに」

陽乃さんの口からそんな言葉が出るとは考えておらず、思わず言葉に詰まる。てか自覚してるのにそのままってどういうことだよ。由比ヶ浜も真っ青なビッチ度だな。

「次にビッチとか考えたらもぎ千切るからね」

何この人、なんで俺の考えてることわかんの？　別に顔にビッチとか書いた覚えはないぞ？

「比企谷君」

こっちこっちとジェスチャーする陽乃さん。何かと思い示されるまま近付くと、突然抱き締められた。

「ほら、これで汗の匂いはしないでしょ？」

今度は先程の匂いとは異なり、柔らかい香りがふわりと辺りを包んだ。薄く香る桃の香りは扇情的で、首の後ろに回された両腕から強く

漂っていた。

「……この匂いも良いですね。あとさっきよりも胸の感触がダイレクトに伝わります」

「当ててるからね～」

それから少しして陽乃さんは俺から離れ、俺も風呂を借りることになった。着替えは心配するなと言われたが、一体どういうことなのだろうか。聞く間もなく俺は風呂場へと押されて行った。

「……バスローブかよ」

風呂を上がり体を拭こうとすると、そこにはタオルと着替えの代わりにちょこんとバスローブだけが置かれていた。仕方無くそれを羽織りフードのところで髪の毛を雑に拭く。足先を脛辺りの部分で拭くと、その時点でもう体が全て拭けていることに気付く。バスローブすげえな。

バスローブのままリビングへ移動すると、陽乃さんはＰＣを叩いていた。淀みないタイピング音は俺が話しかけるのを躊躇わせ、ソファの端に座って彼女を見ていた。

一段落ついたのか、エンターキーを押すと両手を挙げて伸びをした。

「何してたんですか？」

ここでようやく話しかけた。陽乃さんはこちらを見ずに会話を進める。

「卒論」

「やっぱり面倒臭いもんすか」

「だねぇ。ただどちらかと言うと、最近は全部が面倒臭く感じるよ」

後ろからだと彼女の表情は見えない。しかしその雰囲気は気怠そうで、今の言葉が嘘だったとはとても思えなかった。

「あ、そうだ」

何かを思い出したのか、陽乃さんは急に急に口を開いた。

「寝る場所なんだけどさ、私のする問題に正解したら一緒に寝てあげる」

「不正解だったら？」

「そこのソファ」

横幅は五十センチほどで、縦幅は二メートルほど。寝るには充分な大きさのソファだが、ベッドで、それも陽乃さんと寝るとのことなので一応身構える。

「じゃあ問題。この世の全ての人に平等に与えられたものは何でしょう？」

「ない」

「……回答早くない？　本当にそれで良いの？」

この世は不平等の塊である。生まれた時は平等と言うが、それは単なる欺瞞だろう。生まれた瞬間捨てられる命もあれば丹念に育てられる境遇の子もおり、また個々に与えられた才能も違う。言い換えるならば、命というのは環境によって価値が変わる。

つまり生き続けること自体が不平等であり、生き地獄と言っても過言ではない。それを解決する方法というのが、春日狂想にもある〝自殺〟である。

『愛する者』が死んだ時には、死ななきゃならない。そうじゃないと辛

くて生きていけないだろうから。

「はい、じゃあ君はソファで寝てね。枕は後で持ってくるし」

「いやいや、今のは正解でしょう」

不正解を明言せず、しかし陽乃さんはソファで寝ろと言う。

あるはずがないのだ。この世で平等に与えられたものなんて――

「不平等だよ」

「は？」

予期せぬ答えに思わず聞き返してしまう。この人は今何と言ったのだろうか。

「この世でただ一つだけ平等なものっていうのは、等しく与えられた不平等。羨ましいところ、もしくは自分にあって欲しくないところがあればその時点で不平等でしょ？　仮にそれが全くない相手でも、自分と瓜二つの人間だとは思わない。つまりそういうことだよ」

不平等だけが平等。ともすれば定義破綻さえ起こしそうなその理屈は、俺には覆すことが出来なかった。それにこれを言うのが陽乃さんというところにもまた皮肉が効いている。不平等の権化のような彼女は、恐らく数多の憧憬を受けて育ってきたことだろう。

端麗な容姿を持ち、明晰な頭脳を使役し、更に実家のクラスもトップレベル。百人に訊けば百人が羨ましいと答えるようなハイスペック。

〝平等な不平等〟を語った陽乃さんは、そう〝愚痴〟を零した。

5話

朝、スマホが机の上でブーッと振動する音によって目覚める。一定のリズムを刻みながら俺の眠気を奪っていくようで、即座にそれを掴みメールを開いてバイブを止める。手を伸ばした際に首と背中がやたらと軋むな、と思った時初めて今の自分の状況を思い出した。

（……そういや、陽乃さんの家に泊まってたな）

ようやく思考が機能し始めた頃、遅れて漂ってきた鼻腔をくすぐる香りの方へほぼ無意識に顔を向ける。そこでは陽乃さんがキッチンで朝御飯、具体的には卵を焼いているところだった。

「起きたね、比企谷君？　とりあえずちゃっちゃと顔洗ってきてねー。あと歯ブラシは私の歯ブラシの隣に置いてあるから」

返事するのも億劫で、言われるがまま洗面所へと向かう。雑に冷水で顔をバシャバシャと濡らし、備え付けられていたタオルで水滴を拭き取る。歯ブラシを探すと、取っ手の無いコップにピンクの歯ブラシと青の歯ブラシが二本並んでいた。何も考えず青の歯ブラシを取ろうとするが、ふとあることに気付いて手を止める。

（……水滴）

歯ブラシの色だけで見れば俺が青だろうというのは悩むまでもないが、問題はその青に濡れた跡があるということだ。青の方は見ただけでわかるので、濡れていないであろうピンクのブラシ部分を親指でなぞってみる。やはりこちらは水に濡れた形跡がなく、俺は自信を持ってピンクを手に取り、コップの隣に並んでいた歯磨き粉をブラシに付けた。ちなみに歯ブラシに先に水で濡らすのは間違いらしい。泡立ちが良くなって短い時間で磨けたと誤解するためだ。

シャコシャコと歯を磨くこと二、三分。もう良いかと勝手に自分で見切りをつけ、口に溜まった歯磨き粉混じりの唾液を吐く。コップに入っている青い歯ブラシを一旦手に取り、口をゆすいでから青と、それから使用したピンクを水で流してからコップの中に入れる。二つだけがコップの中に囚われた姿はなぜか奇妙な羨望を俺に抱かせ、心の中で首を捻りつつリビングへ戻った。

リビングでは既に食器が並べられており、そのどれもが美味しそうな見た目をしている。香る匂いも香ばしいものばかりだ。

「おかえり～」

「ただいまです。ところで陽乃さん、もしかしてこれ全部作ったんですか？」

「そうだよ。まあ普段はこんなにしっかりしたのは作らないけど、今朝は比企谷君がいるしね」

また陽乃さんは勘違いしそうな言葉を恥ずかしげもなく言い放ち、その言葉によって照れた顔を隠すように並んだ朝御飯へと目をやる。

一言で言えば、ＴＨＥ・日本食といった感じだ。白米に紅鮭、卵焼きに味噌汁と誰しも一度は憧れるようなオーソドックスタイプ（とはいえ既にそれ自体がブランドを持っているためもはやオーソドックスとは言えないかもしれないが）のものだ。

「何でも出来るんですね」

それが俺の混じり気の無い素直な感想であり、特に何も考えずに口にしていた。

しかし陽乃さんは、なぜか少し寂しそうな笑顔を浮かべた。

「まあ、基本は大体ね」

今の俺の言葉にそう返せる人間は果たして何人いるのだろうか。

自己評価が高いのではなく、単なる事実の確認。嫉妬するほど冷静な彼女に、少しだけ愛おしさを感じた。

「いただきます」

「はい、召し上がれ」

会話が無くなるのを恐れ、言っていなかったいただきますを口にして卵焼きを一つ口に運ぶ。甘いものではなく醤油ベースのそれは噛むだけで熱い汁が口の中で溢れた。先程焼いていたからだろうか、丁度良い温度の出来立ては今まで食べたどの卵焼きより美味しかった。

「……小町より美味いじゃないですか。もしかしてそういう薬とか入れました？」

「失敬だな、君は。別にスパイスとして入れたのは一つだけだよ」

「小町はブラコンですよ？」

「それだけ純度の高い愛情なんだよ、私のは」

軽口を交わしつつ、他のものも食べていく。やはりどれも一級品の味で、こんなのが毎朝出てきたらとんでもなく舌が肥えそうだなと考えていた。

にしても。

「この味噌汁だけ別格じゃないですか？　美味すぎてちょっと引くレベルです」

普通の見た目なのに、妙に後を引く味。飲む度に残りが減ることを悔やむほど、これは美味しい。先程卵焼きが過去に類を見ない美味しさだと言ったが、その言葉はこの味噌汁にこそ相応しい。そう感じるほどこの味噌汁は格が違った。

「毎朝作って欲しい？」

「ええ」

言葉を取り繕うこともせず、ありのままを伝える。それが何の隠喩かは、勿論わかっているんだが。

「じゃあ私を泣かせられたらね？」

「鳴く？　……え？　童貞の俺にそれを言いますか」

「誰があんあん言わせなさいって言ったの。クライよ、ｃｒｙ」

「なら授業の帰りにでもレンタルビデオ屋でホラーを借りてきますよ」

「……今日も来てくれるんだ」

思わぬ陽乃さんの微笑みに大きく胸が鳴り、否応なしに緊張させられる。

「じゃあ、はい。これ」

そう言って俺に渡してきたのは一つの鍵。え、これ合鍵だよな？

「今ポケットから出てきた気がしましたが？　てかそれよりそんな風に鍵配ったらダメでしょ」

「だってこれ後で雪乃ちゃんに渡そうと思ってたやつだし。あとこんな風に合鍵を渡す相手なんて、肉親を除いたら君だけだよ」

「……今回は言ってくれるんですね」

「味噌汁を作れって言われちゃったからね、私も今日は特別」

言い終わるなり、殆ど同じタイミングでお互い朝御飯を食べ終わる。それが当たり前のように俺達は顔を見合わせ、手を合わせてご馳走様と言う。その後陽乃さんはお粗末様と言って皿を重ね始める。陽乃さんが鮭と卵焼きの皿を重ねたので、俺は茶碗と味噌汁のお椀を先に重ねて台所へと持っていく。陽乃さんが先のその二つと四本の

箸を持ってくるなり水でゆすいで洗おうとするが、それを他でもない陽乃さんの手によって阻止される。

「今日はまだお客様だから」

そう言って俺に退くよう指示する。服はテーブルの上だからと言われ、半ば強引に着替えさせられた。勿論着替えさせてもらうなんてことはないが。

「いつまでもバスローブじゃ寒かったでしょ」

言われてからやっと気付く。そう言えばバスローブのままだったな。上質なものが使われているのか、全く違和感のない肌触りのこれは着ていることすら忘れさせられた。

「あ、そうだ比企谷君」

「何ですか？」

「歯ブラシ、どっち使った？」

普通ならばしないような、奇天烈な質問。それを答え合わせとして、俺はピンクだと答えた。

「……流石、見逃さないねー」

「ぼっちの観察力を舐めないでください」

「観察力が凄いのはもう認めてるよ」

そんな他愛の無い会話をしながら、俺は授業に間に合う時間ギリギリまで陽乃さんの家に居た。

授業開始五分前に大教室に到着する。少し見渡すと鶴岡は前と同

じ席に座っており、都合の良いことに真ん中の席を挟んで隣の席は空席だった。
少し照れを感じながらもその席へ腰を下ろす。鶴岡はビクッとしてこちらを見たが、俺とわかるなり安心した表情になった。そしてそうだと言いながら自身のカバンの中を漁り出す。

「はい、これ」

見るとそれは俺が落としたはずの定期入れで、中身を確認すると落とした時そのままの状態で安心した。

「ありがとう。これどこで拾ったんだ？」
「あれ、メール見てないの？　あの時比企谷君が座ってたところに落ちてたんだよ」

そう言えば陽乃さんの家でこいつに起こされたんだっけな。ポケットに入れていたというのに見ようともしなかったスマホを取り出し、メール画面を開く。新着メールは二件あり、その内の一つが鶴岡からのものだった。

（もう一つは……？）

送信者には『由比ヶ浜結衣』とあり、どうせ大したことは書かれてないんだろうなと当たりをつけながら開く。内容はやはり取るに足らないことで、サークルには入ったのかと質問されていた。
短く入るつもりはないとだけ打ち返すと、鶴岡が俺のスマホを覗き込んでいることに気付いた。

「……返信してるだけだぞ？」
「え、ああごめん！　……この由比ヶ浜って人、もしかして昨日の綺麗な人？」

おずおずと俺の表情を伺いながら問う。

「いや、こいつはまた別だ」

「そっか。……ねえ」

「？」

「私達って独りぼっちじゃないといけないのかな」

唐突に壮大なことを言い出す鶴岡。一体なぜこのタイミングで言ったのかわからず、何も返せないまま口を噤んでいた。

「あ、ほら。昨日綺麗な人が比企谷君に言ってたでしょ？　個は個でいるべきだって」

「……あれは俺限定の話だ。高校の頃良い感じにぼっちって特性を活かしてたからな」

そのおかげで、そのせいで俺は色んなことを知った。ただしそこまでは口にしなかったが。

「そっか」

それ以上鶴岡は何も言わず、見計らったかのようなタイミングでチャイムが鳴った。

「雨降ってる……」

今日も一緒に昼食を摂ろうということになり、前のように外で食べようと天気を伺うと強くもなく弱くもなくといった雨が降っていた。

「こういうのって、確か桜雨って言うんだよな」

由来は桜に雨が当たるから。何とも安直な言葉だ。鶴岡はへえ～と興味深そうにしている。

「……学食は混んでそうだし、空き教室でも見つけるか」
「え、使ってもいいの？」
「まあ長い時間使うわけじゃねえだろ」

鶴岡の返事を待つことなく歩き出す。遅れないようにと少ししてから駆け足でこちらへ寄ってきて、丁度俺の一歩後ろ辺りをついてきた。

空き教室はそれほど時間をかけずに見つけることが出来た。ゼミで使う教室なのか、大教室に比べて六分の一程度の広さしかなかった。中には誰もおらず、長机の前に二人並んで座った。だがカバンの中から小町弁当を取り出そうとした時、あることに気付いた。

「……あ」
「どうしたの？」
「弁当無いこと忘れてた」

陽乃さんの家に泊まったので小町弁当が無いことなど考えればすぐ思いつきそうなものだが、いつもあるものはそもそも無いという考えすら浮かばないようだ。

「じゃあ私のお弁当食べる？」
「いや、それだとお前の分どうするんだよ」

自分の弁当の蓋を開いて、おかしな提案をしてくる鶴岡。ぼっちは自己犠牲をするのが好きなのか、と自分に鑑みて思考する。

どちらかと言うと、自己犠牲によって承認欲求を満たしていると言う方が正しいかもしれないが。

「ならその卵焼きだけ」

三つ並んだ卵焼きのうち一つを指で摘み、口に放る。陽乃さんのものと同じで醤油ベースのそれは、程良い辛さをしていた。

「どう？」

何の含みもないその質問に、俺は出かかった言葉をすんでのところで喉元に留めた。

（……流石に陽乃さんのと比べるのは酷か）

浮かんだ無礼を咀嚼し、打ち消すように卵焼きを飲み込む。

「俺好みの味だ」

「そっか。良かったぁ」

心底安堵した表情を浮かべる。言葉のセレクトには間違っていなかったことに同じく俺も安堵し、後は雨の降る外を見ていた。

授業が終わり、レンタルビデオ屋へ行く道中あることを思いついた。

空を見上げると雨は既に上がっており、今後も降る様子はなさそうなので傘を持っていない俺は丁度良いと思い進路を変える。

先程までは主要道路沿いを歩いていたが、少し脇道に逸れてある場所へと向かう。まだ一度しか行ったことがない場所だが、最近行った場所なので覚えているはずだ。

辺りをさ迷うこと十数分。四月はまだ日が早く落ちるため太陽は

視界の先に沈んでいた。しかしロスタイムとも言える明るさ、確か薄明と言ったその時間は夜よりも暗い空をしていた。
やっと見つけたその場所は、やはり思い描いていた通りの光景をしていた。

桜の花弁は全て散り、辺り一面無造作に置かれていた。恐らく先程の雨によって流されたのだろう。病院から見えていたであろう桜は、もう既に葉桜へと名前を変えていた。

（……なんつーか、あれだよな）

あの日桜の中に彼女を見つけたからだろうか。陽乃さんはどこか桜に似ている。
見目麗しい仮面を辺りに振りまき、しかしそれによって自身を千切るような、一見すると見ることの出来ない自己犠牲を孕んでいる。花弁を散らすことを強要される陽乃さんは、桜のままだと救われることがない。

――なら、俺が雨になれば彼女を救えるかもしれない。

酷い妄執にも思えるその思いつきは、口に出しても誰にも聞かれることはない。俺だけの妄言で、俺だけの救い。

薄明に照らされた葉桜は、確かにその葉に雨粒を残していた。

6話

白雪姫という話がある。恐らく誰しも一度は聞いたことのある話で、その中でも話の中核とも言える王子様のキスは内容を知らずとも知っていることだろう。あの話の重要な登場人物は三人だ。まず話のタイトルにもなっている白雪姫は当たり前として、彼女を貶める魔女、そして窮地の白雪姫を救う王子様。その誰もが村人などといった替えが効くような立場の者ではなく、全員が全員オンリーワンの役割を持つ。

オンリーワンが同じ場所に三人も集ったのだ。話の展開上これはそうなって然るべきなのだが、これを逆説的にいえば特別な人が三人揃えば何かしらの物語が出来上がることなど当たり前だと言える。

閑話休題。白雪姫は起きる瞬間まで王子様がどんな見た目をしているか知っておらず、もっと言うと彼の人となりさえ知らないのだ。起きないのだと小人に泣きつかれた、やや作為的に言い換えると今の白雪姫は何をしても起きないのだと言質を貰った王子様は何をしただろうか。

つまり起きる確証なんてなく、ただただ綺麗な姫だったからキスをした。そうするとたまたま白雪姫が目覚め、たまたま身分が同じ相手だったため結ばれた。そもそも寝ていた自分にキスをする相手に対して全く警戒しなかったというのもおかしな話だ。

言いたいことが何かと言うと、要は白雪姫の王子様は望んだ相手が来るとは限らない。だが白雪姫にも相手を選ぶ権利がある。

そういった当たり前のことが欠落している物語は、果たして物語と言えるのだろうか。

いや、それは一体誰の物語なのだろうか。

午前八時五十分。大教室の中から見える外は遮られることのない日光に照らされ、まるで地面が歌っているような気がした。対して俺は沈みがちで、五月に入るなり二日目にして既に五月病を発症してい

た。

「大丈夫？」

机に突っ伏している俺に声をかけたのは、今となればもうお馴染みである鶴岡だ。この授業は基本的に隣に座ることが多い。席も前半分の中程のところと勝手にだが指定席にしている。

「ああ……、まあ」

大丈夫だとは言わず、だが大丈夫じゃないわけでもないのでとりあえず曖昧に答える。体は机に投げ出したまま、右側にいる鶴岡に右手を振る。

少しすればチャイムが鳴り授業が始まる。三分程経ち、そろそろかと思って嫌々ながら体を起こした。教授は既に来ているが、今日はなぜか教壇の前に立っておらず教室の隅の方で男女二人組の生徒と話している。どんなやつかなど見ても見なくても同じであり、しっかり顔を見ることなく俺は注意をそこから外す。とりあえずカバンから筆箱やら何やらを準備して、チャイムを待った。

「はい、ちゅうもーく!!」

大きく手をパンと鳴らす。音源は先程教授と話していた男女のうちの一人、遠目から見てもわかる美人だった。メリハリのついた体に肩口まで伸ばされた綺麗な髪。無機質で温度の感じない笑顔はどこか既視感を覚え……。

（!?）

その顔は今朝も見たもので、思わず彼女の顔を凝視した。目を見開きながら驚く様はさぞ滑稽に映ったことだろう。しかしそれがきっかけになったのか、陽乃さんは俺に気付き仮面を少しだけ外して微笑

んだ。

（だから今朝は俺よりも早く出たのか……）

俺の驚愕を隠すようにチャイムが鳴り響き、同じタイミングでスマホが振動する。今はとりあえず俺の意識を逸らすものがほしかった。

メール画面を開くと、まさかの差出人は他でもない陽乃さんであり内容は全力で断りたくなるものだった。

『私が立候補者を募ったら挙手するように』

心底嫌そうな表情をして陽乃さんの方へ顔を向けると、彼女はそれには反応せず自己紹介を始めた。

「私は学生合同文化祭実行委員の雪ノ下陽乃です！　……まー本来は私がやる予定じゃなかったんだけど、就活終わってるなら去年と同じようにやってくれってね」

彼女の荒っぽい自己紹介に、教室内は一気にざわつきだした。合同文化祭？　やあの人めっちゃ綺麗じゃん、どこの大学なんだろうなど皆が思い思いに疑問を口にしているようだった。

「学校には慣れた？」

投げかけられた質問により、先程まで喧騒を保っていたというのに一気に静まりかえってしまう。ふう、と一息ついた陽乃さんは続ける。

「みんなって大学の文化祭がどんなのかは知ってるかな？　多分考えてるよりかなり大きな規模なんだけど、私達はそれをもっと盛り上げようってことで来ました。具体的にはさっきも言った合同文化祭っ

てことね」

ここまで来れば何の立候補者を募るかなど火を見るよりも明らかである。

「ね、あの人ってもしかして前に来た比企谷君の彼女？」

「前って言うとあの飲み会か。……そうだったら良いんだけどな」

去年に比べると距離は数段近くなったように思う。だが現時点で陽乃さんは俺の何かと言われたら、彼女と答えると嘘になってしまうことは確かだ。実際俺はあの人にどう思われているのだろうか。

「てことでこの学校の一年生からも実行委員を募りたいんだけど、どうかな？」

ろくな説明もないまま希望者を募る。仕事内容はどんなものなのか、言い方を変えるとどれだけ面倒臭いのかはっきりしていない状態では誰も手を挙げず、先程までざわついていた教室は一気に静寂に包まれた。

俺？　そんなもん挙げるわけねえだろ。誰が好き好んで社畜に成り下がるんだよ。

「んー、やっぱりいないか。じゃあそこのアホ毛の君！　キミに決めた！」

どうせ俺が立候補しないことも分かりきっていたのだろう。全く慌てる様子もなく俺を指名する。

「すいませんサークルがあるんで」

「こういうみんなの物語を個人で否定するのは頂けないなぁ」

「いやマジで抜けれないんですよ」

言わずもがな嘘である。そんなことは誰よりも陽乃さんが知っているはずだ。

「何サークル？」
「……バドミントン、ですね」
「サークル名は？」
「あー、えっと……」
「嘘？」
「いや、名前がパッと出ないだけです」
「じゃあ確認していくから君が嘘をついていたら来てもらうからね？」
「……あれですよ、あれ。やっぱ先輩に迷惑がかかるんで行きます。それで良いですかね、……えっと、雪ノ下さん」

陽乃さんは笑う。あの嬉しそうな笑みは俺が自信を持つのに充分な感情表現であり、まるで小さな子どもが母親を笑わせるために奔走する時のような気持ちになる。

「じゃあ他にはいなさそうだから君ね。この授業の後は何かある？」
「二限空きの三限四限なので大丈夫です」
「じゃあこれが終わる時間に落ち合おっか。それじゃあ失礼します」

隣の男と共に教授に一礼して教室を出ていく。去り際、陽乃さんは俺の座っている机の上に連絡先と称した一枚の紙切れを置いていった。まさか本当に陽乃さんの連絡先ではないだろうと思いその中身を見る。

『挙手しなかったから罰ゲームね。今日の実行委員の集会までに心の準備をしておきなさい』

……何をされるんだよ、こええわ。

四限が終わり、俺は陽乃さんと正門で待ち合わせる。向かった先には陽乃が既に待っており、小走りになってそこへ向かう。

「今度はさっきの男いないんすね」
「なあに、ヤキモチ？　可愛いとこあるじゃない」
「そんなんじゃないですよ。で、どこに行くんすか」
「うちの大学。本来なら同じ大学の実行委員が連れていくはずなんだけど、君のところは今年から合同になるんだよ。だから勧誘も他大の私が来たってわけ」

歩きながら話す。陽乃さんの通う大学までは一駅か二駅といったところで、歩いて行ける距離である。それでも二人共何も言わずに駅に向かうのは、お互い歩くくらいなら金を使ってでも労力を使いたくないということなのだろう。享楽的な陽乃さんは一概にそうだとは言えないかもしれないが、少なくとも俺はそうだ。

移動すること二十分。俺達は陽乃さんの大学に着き本部と呼ばれる教室に入った。大きな教室には既に人が結構入っていて、見た感じは五十人を超えているほどだ。

「お、隼人！　やっぱいたんだ」
「隼人？」

聞き覚えのあるいけ好かない名前に嫌な予感を抱きつつ、陽乃さんの向かう方を……。

「うおっ!?」

見ようとした矢先、陽乃さんに手を引かれる。その先にいたのはやはり葉山隼人であり、俺と同じく葉山も驚いていた。

「比企谷……、珍しいな。お前がこんなところに来るなんて」

呼び名がヒキタニ君ではなく比企谷。どういう立場なのか明確にした上で会話を始める。

「陽乃さんにな」

「あ、そうそう罰ゲーム。忘れてるかもだけど私は本当にするからね？」

「え、あれマジなんすか」

「比企谷、お前壊されるなよ？」

不穏なことを言う葉山へ縋るような視線を送ってみるが、それを見た葉山は鼻で笑う。こいつ高校の頃より感情を隠さなくなってるな……。それか面子が面子なだけか。どっちでも良いが。

「君はまるで人柱の化身だな」

「何本当はちげえみたいな言い方してるんだよ普通に人柱だクソが」

開始時間まであと十分ある。俺と葉山の会話にたまに陽乃さんが茶々を入れ、そうやって時間を潰していく。相手があの葉山だというのに、何故か俺はこの会話を苦と感じていない。この変化はやはり陽乃さんの影響なのか。そんなことを考えつつ、ガチャリとなったドアの方へ自然と視線を向ける。

「……あ！　葉山君!!　うっそすごーい！」

（……マジかよ）

ショートヘアーで男の先輩（らしき人物）の隣にいた女は先輩を置

いてこちらへ走ってくる。軽薄そうな雰囲気。大学生と言えばこんな感じだろうという量産型スタイル。嫌な既視感は恐らく気のせいではないのだろう。

「やあ、相模さん。久しぶり」
「ホントだよー！　……って、え」
「久しぶりだね、相模ちゃん？　ほら、比企谷君も挨拶しなさい」
「アンタは俺の母親ですか」

それまで尻尾を振る犬のごとく顔を綻ばせていた相模だったが、俺と陽乃さんを見るなり表情が硬直する。
そりゃそうだ。似たような状況のトラウマでの加害者一号と二号が勢揃いしているなんて、いくら葉山がいたとしても看過できるものではないだろう。

「実行委員の雪ノ下陽乃です！　今回もよろしくね、相模ちゃん！」
「え、あ、えと……」

思わぬ相手の挨拶に、相模はちゃんとした答えを返すことが出来ず口篭る。なんとかよろしくと言えた相模であったが、その顔は来た時とは似ても似つかないものだった。俺も一応会釈だけして前の方の席に着くと、遅れて陽乃さんも隣に座った。
少しすると立っていた周りのやつらも座るようになっていき、ものの五分で全員がひとまず席に着いた。

「よし、じゃあ始めようか」

実行委員長であろう高身長の男は静かになった教室の中口を開いた。
内容は合同文化祭の詳細な説明やどこと提携しているか、またそもそもの規模など思ったよりも量が多かった。

「じゃあここで一年生の代表と副代表を決めたいんだけど、誰か立候補者はいる？」

しかしやはりと言ってはなんだが、手を挙げる者はいない。それは委員長もわかっていたようで、どうしようかなと独りごちながら顎を触っていた。

そんな中、ある人物が手を挙げた。一年生は助かったでも言いたげな表情でその人物を見るが、残念なことにその人は一年生ではない。

「四年生の雪ノ下陽乃です。いないなら推薦が良いと思うんだけど、どうかな？」

その質問は周りに投げかけられたように見えるが、反応を期待しているのは委員長だ。そのことは彼にもわかったようで、いないならそれしかないかなと思考を放棄した。

こんなやり方ならどうしたって責任が付きまとってしまうのに。そんな憂慮もなく頷いたのは、彼の能力が高いせいだろう。それは当たり前のことで、そして成功するのも当たり前。そうとしか思えない行動に、そしてやはり陽乃さんもそうするとわかって訊いたのだろう。

「でも君達一年生はみんな殆ど初対面だよね？　だから私から一人推薦したいと思います！」

はあと大きく溜め息をつく。恨みの篭った目で彼女を睨むと、陽乃さんはいつもの楽しそうな笑顔ではなくにやりとした意地の悪そうな笑みを浮かべていた。

「相模ちゃん！　あなた二年の時高校の文化祭の実行委員長だったよ

ね？」

「……は？」

俺の声と相模の声が重なる。全く予想していなかった指名に思わず声を漏らし、相模の方を見た。驚愕に支配された表情は何とも痛ましく映り、その驚いた顔で誰が相模なのか周囲が理解していく。

「そうだったよね？　隼人」

「ん、うん……。まあ」

白々しい確認に葉山もなんとか返す。あいつもあいつで予想していなかったのだろう。必死に思考を回しているようだった。

「他に推薦したい人はいない？」

先程一年生は殆ど初対面だと言ったくせにそんなことを訊く。手を挙げるやつなんているはずもなく、陽乃さんは話を進める。

「じゃあ相模ちゃんが一年の代表で良い？」

「え、まあ俺は大丈夫ですけど……」

委員長は呆気に取られながらもしっかり返答する。彼の目を見る限り、陽乃さんはここでもこんな感じなのだろう。諦念の混じった視線には慣れも含まれていた。

「最後に相模ちゃん、本当に大丈夫？」

（……この人性格悪すぎるだろ）

誰が断れるんだ、こんな脅迫。相模は嫌そうにしながらもまあ、な

んて言葉を口にする。

「私は相模ちゃんの自由な発想がこの実行委員には必要だと思うからさ。悪いんだけど受けてもらえると嬉しいかな」

マイナスから一転、耳障りの良い言葉を並べてやってほしそうに頼む。それを聞いた相模は初めこそまだ渋っていたが、やがてわかりましたと力強い返事をした。

……いや、流石に断れよ。面倒臭くなるのが目に見えてるじゃねえか。

「えと、一年生の相模南です。うちに務まるかはわからないけど、精一杯頑張ります！」

一昨年の文化祭で誰に貶められていたのか完全に忘れているのか、それともその場で乗せられると後のことを考えずに行動してしまうのか。相模は自信満々といった表情で意気込んだ。周りのやつらも拍手を賛成とし、手を叩く音が相模へと降り注いでいた。

「えっと、じゃあ次は副代表かな？　これも推薦にする？」

「それはこの子で決まりだよ。ね？　比企谷君」

「え」

「みんなもそれで良いよねー？」

流れるような確認に、周りは思わず拍手する。疎らな拍手はやがて先程のものと変わらなくなり、否定する間もなく決定してしまう。

「あの」

「さ、比企谷君！　挨拶挨拶！」

俺の背中を叩いて催促する。周りの視線は間違っても助けてくれ

るようなものではなく、小さく溜め息をつきその場で起立した。
「……比企谷八幡です。代表をサポートできるよう、精一杯頑張ります」
言い終えると俺はすぐに座る。周りのやつらは拍手をするタイミングを失い、遠慮がちに聞こえた手を鳴らす音はまるで俺の困惑をそのまま映しているようだった。
それからは委員長が軽く纏めて解散となった。陽乃さんは終わってからもにこにこしており、相模は俺の近くで小さく最悪と愚痴ってから部屋を出る。
「比企谷」
「葉山か。なんだ」
出口とは真逆の俺の席にわざわざ出向いて話しかける。別に話すようなことは無かったはずだが、邪険にする理由もないので要件を訊く。まあイケメンの時点で殺されても文句は言えないはずだけどな。
「……一年だからそれほど責任のある仕事に就くとは思わない。だけどもしも俺の力が必要なら、いつでも頼ってくれよ」
「何の話だよ。というか別にお前の協力なんざなくてもやっていける。なにしろぼっちは全部一人でやらなきゃいけないからな」
「比企谷だけなら俺だって何も……、いや。これは失言だな。忘れてくれ」
いつに無く真剣な表情の葉山。こいつの言いたいことなんて、こっちに来る前から予想出来ていた。一々明言する必要もねえよ。
「汚れ役でもやってもらうか」

冗談半分で言った言葉。二年も前に窘められたことを強要しても鼻で笑うだけだろう。そんな俺の安易な予想は、しかし。

「それもいいかもな」

それは誰のことを考えて言った言葉なのだろうか。俺にはどうしても意味の無い戯言には思えなかった。

帰り道。俺は陽乃さんと並んで歩いていた。傾いた太陽は蒼天を赤く染め、散る雲はまるで止まっているかのようにゆっくりと流れる。

「陽乃さん」
「どうしたの？」
「あれが罰ゲームですか」
「最初は普通に代表にしてあげようと思ってたんだけどね。文句なら相模ちゃんにお願いね？」
「というかそもそも俺を実行委員にした理由はなんですか。まさか俺と一緒にいたいから、なんて可愛い理由ではないでしょう」

橋の上に差し掛かる。穏やかな川の流れは今のゆったりとした時間を暗示しているようだ。

「本質的にはそれで合ってるけどね」
「本質的に」
「そ。正確に言うなら君と堂々と歩くための理由が欲しかったの」

今までも普通に一緒にいただろう。それとも実は陽乃さんの中ではこそこそしていたのだろうか。示す意図がわからずに、出来る限りの思考を巡らせる。

「だから、これは近付いた距離の証」

ふわりと、唇が柔らかさに包まれる。眼前には陽乃さんの長い睫毛にくりっとした目が笑っていた。キスされていると気が付いたのは、触れている唇の角度が変えられた時だった。

「……こんなことしてたら、勘違いされますよ」

「勘違いじゃないから安心しなさい。……っと、ありゃりゃ。これはまずったかな？」

陽乃さんは俺から距離を取る。足音で気付いたのか、俺の視線の奥の人物へと体を反転させた。

「陽乃。あなた何やってるの？」

和服を身に纏う上品な女性。その顔は以前にも見たことがあり、その時は雪ノ下の母として出会った。

今は陽乃さんの母親として。この違いは重要である。

「まさかこれが理由？」

「何の話？　言いたいことが見えてこないよ」

「っふ、そんな口を私に利くのね」

俺には要領を得ない話で言い合いになる二人。俺はその会話とも言えない口喧嘩を傍目から見つつ、あることに思いを馳せていた。

陽乃さん、あなたにとって俺は一体どういう存在なんだろうな。ただの妹の知り合いか、珍しい後輩か、はたまたはそれですらないのか。

――見えてたんですよ。あなたが自分の母親を見つけてから俺にキスするところ。今のを親への一手とするのなら、俺はそもそも人とすら見られていないのか。

ただそれでも、俺は恐らく陽乃さんのことが好きだと思う。その気持ちが続く限り、たとえ俺は彼女の道具と成り下がっても、死ぬまで道具として利用され続けることだろう。

夜の帳が降りる。何も考えなくても夜は訪れてくれる。それが思考を放棄した状態だったとしても。

7話

「ところで……あなたは確か、雪乃の友達だったわよね」
　話が一段落済んだのか、陽乃さんのお母さんは俺へと矛先を変えた。
「本人に言うと否定されるので、まあ知り合いといったところです」
「親から見たら子どもの周りにいる子はみんな友達なのよ」
「なら俺は陽乃さんの友達でもあるんでしょうか」
「私達の言い合いを見てそう思えるのなら、あなたは賢くはないようね」
「直近の会話に鑑みた場合はあなたの方が荒唐無稽なことを言っていると思いますが？」
　売り言葉に買い言葉。お互いの意図するところはお互い分かりきっているのに交わす戯言。やはりこの人は陽乃さんの母親なのだと、理解を超えたところで直感する。
　雪ノ下雪乃の母親だと感じない点については、今は言及しない。
「というかね、お母さん」
　陽乃さんは会話の間隙を縫って口を挟む。
「別に比企谷君とはそういう関係じゃないよ？」
「状況証拠を幾つも並べられて、それでもあなたの言葉を信じろって言うの？」
「何をどう捉えてるのかは知らないけどさ、少なくとも今一緒にいるのは実行委員だからだよ」
　その言葉を皮切りに、実行委員とは何か、また今はその帰りであることを伝える。その流れに一切の淀みがないのは、流石に深読みしすぎ、穿ち過ぎだろうか。
「……ま、良いわ。私はまだ寄るところもあるし、この辺でやめておきましょう」
「そ。それなら何より」
　お母さんの冷ややかな目に、陽乃さんの挑発的な表情。どこか取り残されたような錯覚を覚える。その正体は、多分単純に俺が彼女らの

土俵に立てていないからだろう。
「……俺帰りますね」
夕日に照らされる彼女らを背に、歩き出す。呼び止める者はおらず、俺は静かに影へと隠れて行った。

夕食を済ませ、風呂も上がり自室のベッドでのゴロゴロタイム。こういう一見無駄な時間が実は一番贅沢な時間の使い方なんだよな。かの偉人も余暇時間に学を得たのだ。むしろこれこそが学生にとって正しい時間の使い方なんじゃないだろうか。
（……キスか）
無意識に指を唇へと添える。キスというのは一般的に目を閉じるものだと聞いていたが、陽乃さんは一切閉じていなかったな。笑顔の見え隠れする瞳は、蠱惑的と共になぜか防衛本能が働かさせられた。考えれば出そうな問いを、スマホのバイブ音によって中断される。
充電器に繋がれたスマホを手に取り画面を確認する。青いランプはメールを示すもので、送り主は陽乃さんからだった。
『明日代表と副代表は本部招集。相模ちゃんには君から連絡しておいてね♡』
……。
『メアド知らないんで』
送信。再びスマホを頭上へと投げ出すと、即座に返信が返ってくる。
『それを何とかするのが君の任務だよ』
……俺の任務ねえ。適当にごねて無視しようかとも思ったが、それ

で折れてくれる陽乃さんではない。それっきり俺は返信せず、代わりに別のヤツへメールを送った。

『相模に明日招集があるって伝えておいてくれ』

宛先は葉山。あいつなら連絡先も知っているだろうし、何より頼まれてくれるはずだ。

送ってから五分ほどで、葉山からも返事が届いた。

『これが相模さんの電話番号だよ。相模さんには君から電話があるって伝えておいたから、遠慮せずに電話してね』

少しスクロールしたところには十一桁の文字列がある。もしかしなくてもこれが相模の電話番号なのだろう。

『誰だお前』

凡そ葉山のしそうにない行動。送り主は間違いなく葉山だろうが、誰が考えた行動なのかは少なくとも葉山ではないだろう。

まあ、この流れの登場人物は相模を除くと三人しかいないんだけどな。自明の確認。だがそれが会話でもあるはずだ。

しかし、俺の予想は外れていた。

『俺も比企谷は相模さんと話しておいた方が良いと思うんだよ。あと別に陽乃さんからの差し金ってわけじゃないからな?』

その下の文にはアドレスは電話をしたと確認が取れ次第送るとのことだった。陽乃さんの時と同様、これ以上話しても仕方なさそうだ。思わず漏れる溜め息は何度目のものだろうか。考えるのも馬鹿らしい。

(女に電話をかけるのは、陽乃さん以来か)

葉山のメールにあった電話番号をタップし、電話をかける。コール音は五度ほど繰り返されるが、六度目の途中でその音は途切れた。

『……もしもし？』

「相模か？」

『聞かなくてもわかること一々聞くな』

刺々しい物言い。俺と話すのが心底嫌なのが、電話越しでも伝わってくる。てか声だけでわかるほどお前と会話した覚えはないがな。

『で、何』

「明日また本部で招集だ」

『……後は？』

「後？　いや別にこれだけだが」

『は、はあ?!　アンタがどうしてもうちに言いたいことあるって言うから、こうやって嫌々話してやってるってのに、そんだけ!?』

別にどうしても話したいことなんてないんだが、これは葉山の仕業だな。あいつは一体俺に何を求めているんだか。

「切るぞ」

『ちょ、ちょっと待って！』

「……嫌々話してたんじゃないのか」

『キモい声出さないでよ。……、その、うちどこが本部かわかんないんだけど』

「は？　いや今日行っただろ」

『……だから、それがわかんないって言ってんの！』

流石に意味がわからず閉口する。今日行った場所がわからなくなる理由を色々と考えてみるが、どうにも思い当たるものがない。相模がアルツハイマーだとか、もうそういった現実離れしたものぐらいし

か考えが及ばない。
『……その、うち今日は先輩について行ってただけだし』
「……なるほどな」
色か。そりゃ俺には思いつかないわけだ。
「じゃあ総武高の最寄り駅に集合な。時間は……、あれ。そういや俺聞いてねえな。まあその辺は追って連絡する」
『……』
「相模？」
『あ、えと、わかった。……言っとくけど、隣歩くからって彼氏面とかしたらマジで吐くから』
「じゃあ昼は抜いてこい。それじゃ」
相模の返事は聞かずに通話を切る。最後の嫌味に対する返しぐらいは聞いても良かったかな、とダラダラタイム以上に無駄な思考を重ねてから、陽乃さんへ何時からなのか聞くためメール作成画面を開いた。

「……ここで良いんだよな」
時刻は午後一時五十分。招集は三時からだったため、早めの二時に待ち合わせることにした。駅の東口は人通りが多く、その中で場違いに立ち止まっているのは些か落ち着かない。
「……比企谷」
不意に呼ばれた名前に、脊髄反射で振り向く。俺がここへ着いて数分もしないうちに、相模もここへ辿り着いていた。
……十分前行動は出来るみたいだな。なんて、誰目線かもわからないような感想を抱いた。
「じゃあ行くぞ。ここからだと多分本部のある大学の最寄りまでは十

分そこらだ」
「そ。……それで、ご飯はどこで食べるの？」
「ん？　ご飯？　昼飯のこと言ってんのか？」
「うん。だってお昼抜けって言ったし」
……マジで言ってんのか？　前から色々と足りないやつだとは思っていたが、昨日のアレすら意図を汲めないのか？
とは言いつつも、俺に非が全くない訳では無い。むしろ五分五分くらいまでは責任が分散されそうだ。
「……あー、あれだ。向こうの駅前にサイゼあるんだよ。そこで済ませる」
無論俺は昼飯を済ませているが、本当のことを言うと更に糾弾されそうなため話を合わせる。
「……大学生にもなってサイゼって」
「いやいやサイゼ美味いだろ。あれであのコスパとか頭上がらねえよ」
「まあ美味しいけど」
改札を抜け、向かう方面のホームへ繋がるエスカレーターに乗る。相模を待っている時にも思ったが、こんな時間でも意外と人がいるもんなんだな。疎らではあるが確かに人はいた。
「わざわざ一緒にご飯食べる理由は？」
「……親睦を深める、的な」
「は？　ガチキモい。彼氏面すんなとは言ったけど、別に彼氏になろうとすることも許したわけじゃないから。わかってると思うけどうち比企谷のこと真剣に嫌いだから」
返事の代わりに溜息をつく。一々訂正するのも面倒で、後は会話を交わさずに電車が来るのをひたすら待っていた。

本部に着いた時間は三時にギリギリの二時五十五分だった。理由は相模の食べるスピードが予想以上に遅く、しかし少し急かせると機嫌を悪くするという悪循環のためこうしてギリギリに着くことに

なってしまった。内容は伏せ、委員長に遅くなったことを謝罪する。しかし彼は俺の思っていた以上の人格者で、そのことを全く咎めずに、ただただ急な呼び出しに申し訳なさそうにしていた。
　むしろ、それよりも問題なのは。
「ふ～ん。相模ちゃんと一緒に来たんだ」
　なぜか本部にいた陽乃さんは俺達が一緒に来る姿を見て、少し機嫌を損ねているようだった。当然相模は萎縮している。
「その辺で出会ったんですよ。それなのに一緒に行かないのは逆に問題でしょう」
「ありゃ、もしかしてお姉さん飽きられちゃった？」
「文脈めちゃくちゃですよ。それにそもそも飽きさせてくれないじゃないですか」
「これはまた、判断に困ることを言うね君は」
　相手にしてもらってる上で飽きさせないのか、してもらえていないから飽きることすら許されないのか。どちらが俺の意図した真実かなんて、答える義理はない。
「で、俺達を呼んだ理由はなんでしょうか」
　陽乃さんとの会話を強引に打ち切り、委員長に本題を尋ねる。陽乃さんは少し不満そうに（と言うには読み取れる感情が少なすぎるが）していた。
「あ、それなんだけどね。二人で近隣住宅への挨拶に行ってほしいんだよ。粗品持ってさ」
　そう言って机の上にあった紙袋から一つ取り出して俺へ手渡す。
　何の変哲もないタオルに、大学の名前が書かれてある。なるほど、確かに粗品だな。
「と言っても粗方は周り尽くしてるし、後は留守になっていたところの数軒だけなんだけどね」
　言いながら、委員長はおもむろに自身のスマホを取り出した。
「地図はＰＤＦで送るよ。赤丸の付いているところが回ってほしいところ」
　そしてさも当然かのようにＳＮＳアプリを開く。バーコードを画

面に出しているが、それが連絡先を交換するためのものなのだろうか。生憎インストールしていないのでわからないが、恐らくはそうなのだろう。
「すいません、俺それ入れてないんですよね」
「あ、なら入れてもらえるかな？　昨日は恥ずかしい話忘れてたんだけど、本来はグループに日程とか貼るんだよ。一年生を招待することが頭から抜け落ちててね」
「了解です」
　アプリを入れ、委員長と連絡先を交換して地図を送ってもらう。ついでにグループも招待してもらった。
「……良し、これで大丈夫だね」
「地図も問題なく見れますし、大丈夫です」
「っと……。ごめん、代表は君だったね。えっと……」
「あ、さ、相模です！　か、会長の連絡先とかは比企谷に頼むので、大丈夫です！」
「そう？　それなら頼むよ」
「はい」
　紙袋も持ち、本部を出ようとしたその時。手に持っていたスマホが鳴動した。バイブ音のため周りには気付かれていないが、すぐに見れる状態なので中身を確認する。
　先程入れたＳＮＳの通知であり、会話画面には一番上に雪ノ下陽乃とフルネームで書かれてあった。このアプリで陽乃さんと交換した覚えはないのだが、もしかしたらグループから交換等出来るのかもしれない。それ以上にこのタイミングで陽乃さんから口頭ではなく文字で情報が送られてきたのだ。そこに意味が無いと考えるには、どうしても無理がある。
『その挨拶の仕事、私と回らない？　乗ってくれるんだったら地図が不安だとか言ってくれたら適当に話つけるよ』
　この人の考えることは本当にわからない。単に一緒にいたいから

などという安直な理由はないだろうし、かと言って今一緒に行動することが何かに繋がるとは限らない。
それに回らない？　とあるように提案されているのだ。強制ならばいざ知らず、こういった聞き方だと緊急性はないのだろう。
出来心だろうか。ゆえに。
「では行ってきますね」
相模の背中を軽く押し、委員長と陽乃さんに背を向ける。相模が触らないでよと距離を取るが、そんなことはどうでもいい。
俺と、恐らく委員長にも聞こえたはずだ。小さな声で彼女は。
「そういうことしちゃうんだ」
それは今まで聞いてきた中で最も温度を持っておらず、低い声、冷たい声というよりは動きのない言葉というのが最も的を射た表現だと感じた。
俺はついぞ振り向くことも出来ずに、その場を後にした。

「ではよろしくお願いします」
最後の一軒を回り終える。どれ位時間がかかるのかと思えば、回るべき家が思ったよりも少なかったため一時間ほどしか経っていない。まだ四時前といったところである。太陽もしっかり地面を照らし、蒼天が頭上を支配している。
「これで終わり？」
「だな。終わったらその場で解散らしいが……、駅までの道わかるか？」
「は？　うちのことエスコートしようとか考えてんの？　キモすぎるから別にいいし」

「……この際俺がキモいのはまあ良い。だが道わからんのなら意地張らずに言っとけよ」
「てかホントに大丈夫なの。この辺なら来たことあるし」
なら大丈夫か。そう考え俺は駅の方に歩き出すが、少し歩いてから立ち止まる。
「……なんでついてくんの？」
「うちも電車使うからだけど？」
エスコートはキモいけど一緒に向かうのは良いのね。女心はわからんな。
「そうか」
それ以上は何も言わず、互いに無言で駅へ向かう。相模は陽乃さんよりも少し小さいため、一歩の大きさがが彼女とは違う。歩くスピードを落とし、バレない程度に歩幅を合わせる。

「駅、着いたな」
「一々言わなくてもわかる」
相変わらずキツい物言いだ。ただ考えてもみれば、相模にとってはトラウマの元凶と長い時間を過ごすことになっているんだよな。昨日も思ったが、流石に同情してしまう。俺だって高一の頃に折本と共に行動しろと言われたら躊躇してしまうだろう。むしろしたくない。
「俺本屋寄って帰るわ」
だから俺に出来ることはこの場を自然に離れることであり、それが相模にとっても一番嬉しい状況のはずだ。
「わかった」
相模は興味無さげに返事し、改札へと歩を進める。
が、何を思ったのか急に立ち止まった。
「比企谷、じゃあまた」
それだけ言い残すと相模は改札を抜けていった。俺はその言葉に何も言えず、ただ後ろ姿だけを見ている。
（……あれは成長なのか？）
少なくとも高一の俺は折本にあんなことは言えないだろう。〝ま

た〟なんて言葉は会いたくない相手には使いたくもないはずなのに、それを言えるというのは少しは振り切れた証拠たり得るのか。

多分そうなのだろう。ましてあいつはもう大学生だ。願わくは、あの頃の自分を省みて同じ過ちを繰り返さないでほしいものだ。

8話

陽乃さんではなく相模を選んだあの日から二週間が経った。あれから俺は陽乃さんの家には行っておらず、会話も殆どしていない。時たま俺から話しかけることはあるが、それでも陽乃さんは以前のように嬉しそうな顔をすることも、また面倒臭そうにすることもなくなった。その他大勢と同じ、そんな表現が当てはまってしまう。

「比企谷」

「ん？」

「言われてたやつ、やってくれた？」

代わりにと言っては何だが、最近は相模がよく話しかけてくるようになった。依然として俺のことを嫌っている節はある。しかしそれでも会話さえままならなかった頃に比べると態度は明らかに軟化していた。

「おう。一応確認しておいてくれ」

プリントアウトした名簿を手渡す。四校の一年生全員の名前が印刷されたもので、先日やっと名前の正誤チェックが終わったのだ。どうせなら各大学にデータで提出させるようにしたらコピペするだけだ終わったのに、どうしてかうちの委員長様は無理にでも仕事を作っているように見える。

……思っていたより楽だな。そう思わせないためってところだろうか。今のうちに仕事に慣れさせる。そう考えると納得だが。

（面倒臭いんだよな、正直）

一年生の代表と副代表、つまり相模と俺には他よりも多く仕事を回される。これも後のことを考えたら理解出来るが、面倒臭いものは面倒臭い。しかも相模は何かと理由をつけて俺に任せることが多々ある。専業主夫志望を働かせんなよ、本当に。

「お前が養ってくれるんなら別だけどな」

「は？　キモすぎ」

「俺の罵倒に限ってすぐに理解するのはなんでだよ」

「比企谷がキモいからでしょ。……ああもう！　どこまでチェックし

たか忘れたじゃん！」
　名前欄と持ってきた紙を睨めっこしながら不満を漏らす。改めて考えてみると今の俺と相模は変な距離感だな。そう思わずにはいられない。
「お疲れ様、比企谷、相模さん」
「葉山君！」
　パッと弾けるように相模は顔を上げる。葉山はいつものイケメンスマイルを浮かべており、手にはＡ４サイズのプリントの束があった。
　てか相模お前、今のでまたチェック漏れただろ。色々注意力散漫なんだよ。
「これで良かったかな、相模さん」
　葉山は束の一番上のプリントを手渡す。これも数日前に相模が委員長に任されたものの一つであり、一人ではやり切れないと俺に泣きついたものだ。そこから横流しで葉山へと渡った。つまりワークシェアリングなわけで、別に俺が楽したかったからとかじゃない。絶対に。
「うん！　ありがとう！　ほら比企谷からもお礼言いなよ」
「ん……、……いやいや、別に頼んだわけじゃねえから。押し付けたのが俺だ。だから立場は俺の方が上なわけでだな、つまりご苦労とは言えどお礼なんて言う筋合いはない」
「比企谷キッモマジでキモい」
「あはは、いいよ相模さん。比企谷も俺に頼ってくれたんだからさ、これは成長を見せちゃったことに対する照れ隠しだよ」
　は？　何言ってんのこいつ？　馬鹿なの？　イケメンってパッシブで頭脳デバフ受けてんの？
「比企谷……、何でそんな顔してんのさ」
「いやだって葉山が頭のおかしい発言するから。流石にイケメンスキーのお前でも今のは引いただろ？」
「誰がイケメンスキーよ！　ていうか全然引かないし、むしろ比企谷の照れ隠しは合ってるでしょ！」

「合ってるわけねえだろ馬鹿かお前！」
「二人とも仲良くなったな」
葉山が（こう言うのは誠にどころか死ぬほど遺憾だが）微笑ましそうに俺達を見て、そう笑う。
俺と相模が仲良く、ねえ。チラッと相模の横顔を盗み見るが、感じるものは何もない。ただビッチになりきれない中途半端女だな、としか思えない。
「っ」
視線に気付いたのか、相模は横目で俺を見た。正確には視線を感じる方向だろう。だが今ので二人の目が合ってしまう。
「……すまん」
「えっ?!　いや別に大丈夫……、あ、やっぱりキモいから！　別に何も思ってないから!!」
なんだこいつちょっとあざといな。変に見栄張るよりはこっちの方が全然好感持てるわ。いや別にあざといのが良いわけではなく。
「あ、そろそろ会議始まるみたいだね。俺は戻るよ」
「うん！　またね！」
「ん」
そして葉山の言う通り、それから程なくして会議は始まった。
席は前と同じく陽乃さんの隣に座っているが、あのむず痒いような絡みも、ドキッとするような視線もない。ただの隣人。陽乃さんを意識すれば意識するほど、過去とは比べるまでもなく冷たく感じる。
今日は特に差し迫った仕事はないらしく、今後の予定を確認してどの日に誰が来れるかを詰め、解散になった。以前なら陽乃さんと一緒に帰るのだが、最近はもう別々だ。別にひとりだから寂しいだとか、そんなことは思わない。ただあれだけのことでそこまで引きずるのかと思うと、どうしても思うところは出てきてしまう。
それとも、彼女を選ばない俺には興味が無いのか。悪寒にも似た予感は、たしかに俺を凍りつかせた。
「比企谷君」
「っ」

そんなことを考えていたからか、およそ二週間ぶりに俺の心は跳ねた。それまでにも何度か話してはいたが、向こうからは本当に久々だ。
「どうしました？」
努めて冷静に訊く。俺はあなたには興味ありませんよ。そんな風を装いながら、内心の狂喜を隠す。
「……そっか、安心したよ」
「何をですか」
「君がそんな風に想ってくれてたなんて。もっと早く話しかけたら良かったかな」
陽乃さんは少し照れたように笑う。頬をかく仕草は今まで見たことがなく、その意味を考えるが『照れ臭かった』しか出てこない。彼女に限って、そんなことがあるのだろうか。
というか、それよりもだ。
「俺、そんなに想ってるような顔してましたか？」
「私を誰だと思っているの？」
「……ですね。場所変えましょうか」
気付けば本部からは半数以上の人が消えていた。それほど話していたわけじゃないのに、不思議なものだ。
「何？　もしかして襲われちゃう？」
「お望みとあらば」
軽く流して陽乃さんの手を引く。それに驚いたのか、陽乃さんは慌てて自分の鞄を持ち、俺についてくる。本部を出て少ししたところにある空き教室。そこに連れ込んだ。
カーテンが閉まっていたため教室には光があまり届いておらず、電気も点いていないため全体的に薄暗い。
二人だけの空間。無音がどうしようもなく体を刺す。
「比企谷君さ、ここ最近お姉さんが構ってくれないからって怒っちゃっ……んんっ?!」
言葉を遮って口付けをする。苦しそうにして押し返すが、構わず抱きしめる。

やがて抵抗がなくなったところで唇を離す。生理的なものだろうが、陽乃さんは少し涙目になっていた。
「怒ってるというか、不思議なんですよ。あんな茶目っ気でそこまでします？　みたいな」
「……それで無理やりキスしたの？　ガハマちゃんとか雪乃ちゃんならこれだけで落ちたかもしれないけど、私はそうはいかないからね？」
「質問に答えてくださいよ」
「答えるのが恥ずかしいってことくらい察しなさい、バカ」
その口調だとそっぽを向くのがお約束なものだろうが、何故だか陽乃さんはじっと俺の目を見ていた。ほんのり頬を朱に染めているが、構わず俺の目を覗き込む。そこから何を読み取られているのか、俺は少しの恐怖とある種の期待を滲ませた。
「今日陽乃さんの家に行っていいですか？」
この人相手に自然な流れや口上は不要だ。そんな不自然、彼女が看破出来ないはずがない。
「……じゃあ、帰る？」
そう言いながらも、陽乃さんは俺の首に両手を回す。彼女が目を瞑るまでもなく、俺は彼女の腰へ手を回して再度口付けをする。それはやはり正解だったようで、陽乃さんは目を細めながら、やがて閉じた。

「ん、メール」
「誰から？」
陽は落ちた午後七時。陽乃さんの家で夕食を食べていた時、不意にスマホが鳴った。
「……聞いても怒りません？」
「ん？　それはお姉さんが君に送ったメールの主に嫉妬するってこと？」
「端的に言えば」
「お姉さんを誰だと思ってるのよ」

「相模からです」
「……ふーん」
（この人意外と嫉妬深いな……）
　他の人には見せない、いかにも人間ですよとアピールする顔と雰囲気に俺は小さな笑いをこぼし、メールの内容を確認する。何かまた頼み事だろうか。別名仕事の押しつけ。
『もし良かったらだけど、今週末どっか行かない？　うち的には葉山君と二人っきりが良かったんだけど、なんか葉山君がどうしても比企谷とも行きたいって。まあ別に断ってもいいけど。そしたらうちと葉山君の二人っきりだし』
　……なんだこれ。珍しいこともあるもんだな。高校生の頃なら考えられないな、こんなメール。
「で、どんなメールだったの？」
「遊ばないか、的な」
「へえ。行くの？」
「そんなわけないでしょう」
　俺は適当に行かないとだけ書いて送信する。断っても良いのなら喜んで断るだろ。誰が好き好んで嫌われに行かなくちゃならないんだよ。そうでなくとも時間が勿体ない。
　ブーッ、ブーッ。
「……またか」
　特に陽乃さんには何も言わず、メールを開く。今度もまた相模からで、しかし内容は想像とは異なっていた。
『葉山君に言ったら、比企谷が来ないならまた今度比企谷が来れる時にしようだって。本当は死ぬほど嫌だけど、来てよ』
　……なんだこいつ、ちょっと可愛いな。なんかツンデレの匂いがする。まあこいつに限っては確実に俺のことを嫌っているからデレるなんざ天地がひっくり返ってもありえないだろうがな。
『なら行く。何時にどこだ？』
　過去の体裁が軽くなった分、葉山も仲良くなって欲しいからとかいう戯言のためではないはずだ。何か別に理由がある。今のあいつに

は、そういう前とは違う含みを感じる。
　最終的に、週末の昼過ぎとのことで昼飯は各自で食べてくる旨が返ってきた。そのメールを受けた時には既に夕食は食べ終わっており、俺が皿を洗っている時だった。
「比企谷君、お風呂湧いたしそれ洗い終わったら先に入っておいで」
「いやいや、人様の家で一番風呂を貰うとか図々しいでしょう」
「それを言うならお皿を洗わせてるのも図々しいよ？　合鍵を渡してお皿を洗わせる。この意味をよく考えるんだね」
「……なら、お先に頂きますね」
　丁度最後の皿を洗い終え、乾燥機に詰めたところ。俺の着替えは既に何着か陽乃さんの家に置いてあり、いつもの場所からそれを取り出して風呂へ向かう。
　こういうのが同棲生活なのかもな。思わずにはいられなかった。

　洗髪、洗顔を終えもう一度シャワーを浴びる。この家の高そうなシャンプーにもやっと慣れたな。いつもはなんか藻がどうたらとかいうのを使っているから、こういういかにも値段張りますよみたいなのは初め本当に慣れなかった。まあ慣れたってのは、つまりそれだけ長い時間ここで過ごしたのだろう。少しだけ感傷に浸りながら、後ろのドアが開く音を聞いた。
　……後ろのドアの開く音？
「ひゃっはろー、比企谷君！　お背中流しに参りました！」
「ちょっ、馬鹿じゃないですか?!」
「据え膳だよ。す・え・ぜ・ん」
　いたずらをする子どものように笑う陽乃さん。しかしいくらタオルで隠しているとはいえ彼女の肢体はどう見ても子どものそれではない。
「さ、比企谷君！　私の見立てでは多分丁度洗顔が終わった頃だと思うんだけど、どう？」
「あんたマジで怖いな！」

「やっぱり当たり？　じゃあ体は私が洗ってあげる。体の隅々までね」
「いや結構ですから！　俺上がりますんで！」
　このままだとまずい。血流はもう既に局部へ集中しているのだ。何がやばいかってもう我慢出来る自信が無い。
「じゃあ……、えいっ」
「あざとってか押し付けんな陽乃さん!!」

　……まあしかし、あれだ。そりゃあれだよ？　こういうのは付き合ってからじゃないとさ、やっぱり不誠実じゃん？　そう思って俺も陽乃さんに言ったんだよ。だけど。
『あーあ、今日付き合ってもない男の子から無理やりキスされちゃったなー？　純情弄ばれちゃったなー？』
　とか言われたらさ。何も反論出来ないじゃん？

　結局、俺は我慢出来ませんでした。まる。

9話

「やあ比企谷。早いね」
「今来たところだ」
　時間も時間だからだろうが、週末の駅は少し混んでいた。十二時四十五分。昼飯時を少し過ぎた時間なので待ち合わせをする人が多い。かく言う俺もその一人であり、現にこうして葉山を待っていたわけだ。あと相模。
「……相模がいない間にに訊いておくが、何のつもりで呼んだんだ？」
「だからこんなに早かったのか。比企谷にしては珍しいと思ったよ」
　葉山は普通のデニムに白地のTシャツを着ていた。何の捻りもないファッションだが、自分に自信が無いと出来ないオシャレ。俺自身そういうのに興味はないが、そんな服装をしても様になっているのは流石葉山だな。さすはやさすはや。
「理由か……。まあ、今は普通に三人で出掛けたかったからって思っておいてくれよ」
「聞こえよがしに……。やっぱお前、高校とは全然違うな」
「その理由くらい君はわかっているんだろ？」
　こいつの楽しそうな顔は、とりわけ今の顔は心底嬉しそうだな。俺に向けるってのが気持ち悪いことこの上ないけど、仮面を付ける必要がないってのはそんなに楽なのかね。俺はそんなもん付けるまでもなく認知されないから、葉山の気持ちは何一つわからないが。
　適当な雑談をすること五分ほど、ようやく相模は姿を見せた。相模はクソ短いショートパンツに赤ちゃんのうんこみたいな色をしたニット生地の服を着ていた。うんこだらけだな、とか言ったら怒られるだろうが。
「葉山君！　……と、やっぱり比企谷も来たんだ」
「んなうんこ見るみたいな目すんなよ」
「は？」
　っと、口が滑ったな。あと俺同族嫌悪とか考えんな、別に俺はうんこじゃねえだろ。

「……で？　どこ行くんだ？」
「うん。まずは服を見に行こうかなって考えてたんだよ。そろそろ夏服とかも見ておきたいしね」
「あ、やっぱり？　うちもそれ言おうと思ってたんだ～」
「あ、そ」
　相模は俺をいないものとして扱うのか、葉山の隣にぴったりとくっつき葉山と同調する。俺は二人の後ろをゆっくり追い、話を振られるまでは黙っていた。今回の主役は恐らく相模だ。俺が口を出すのはあいつにとっても好ましくない、むしろ嫌と感じるはずである。
　さっきの葉山の口ぶりからすると、俺を呼んだ理由もあるはずなのでいずれ役割は訪れるだろうが、今はまだその時ではなさそうだ。
　駅の近くにはモールがあることが多い。俺達が待ち合わせに選んだ駅はそれを考えたもので、中に入って適当な服屋を見る。内装は特にいうようなこともないような普通のもので、男女どちらに向けた店というモチーフもなさそうだ。
　店頭に置いてあるチェックの長袖のポロシャツはユニセックスとあり、どちらにも向けた展開というよりはカップル向けの店なのかもしれない。俺はしたくもないがペアルックという文化は昔から現代まで脈々と途絶えることなく受け継がれているわけで、一定数の需要はあるのだろう。
　そんなことを考えていたからか、俺は一人店頭に取り残されていた。葉山と相模は既に店内へ入っており、二人でレディースの服を見ていた。
「葉山君、これどうかな？」
「うん、良いと思うよ。明るい色が相模さんに合ってるし」
「ありがとう！　えっと、じゃあこれは？」
「そういうのも良いね。大人な感じのギャップが出そうだ」
「ちょっと、それどういう意味～？」
　……あれが神対応ってやつか。基本は同調しておいて、褒めながら突っ込ませる。外から見れば冷静に理解出来るが、多分当人になったらこれだけ上手く立ち回れないだろう。本人には言わないが、この辺

は尊敬するところだ。俺には必要な技術ではないとかいうそもそもの話は置いておく。
「比企谷！　こっち来なよ！」
　遠巻きに見ていたのがどう映ったのか、葉山は俺に来るよう呼びかけた。なんだ、もしかして入りたくても入れないやつみたいに見えたのか？　もしそうならこれ以上の煽りはないぞ葉山。
　なんて考えつつも、呼ばれて行かないのは逆に意識していると思われそうなので、ゆっくりとそっちへ向かう。葉山は接待スマイルを外さず、相模はわかりやすく嫌そうな顔をしていた。正直なのは良いことだが、これ俺以外がされたら傷つくレベルのやつだぞ。
「比企谷はどれが似合うと思う？」
「は？　お前レディース着んの？　気持ち悪いな」
「わかっててはぐらかすなよ。恥ずかしいのはわかるけどさ」
　だからこいつなんで訳分からないこと言うの？　やっぱ頭に呪いでもかけられてんの？
「比企谷……、悪いけどうちは比企谷のこと嫌いだから無理だよ」
「こっちから願い下げだ」
「……チッ」
　葉山の前で舌打ちとかお前いろはす道場の門下生なら落第だからな？　てか俺も地味に傷つくわ。
「ん……、まあこれとか良いんじゃねえの」
　チラッと見てみると、なんとなくだが相模に似合いそうなのを見つけた。さっきまでの服とはまた種類が異なる、シンプルなシルバーのネックレス。真ん中にはハートのアクセサリーがあしらわれており、好意的にとると可愛い、否定的にとると子どもっぽいと思われそうだ。
「……」
　相模は俺から手渡されたネックレスを見て、まじまじと見つめてからつけてみる。鏡を見て確認し、葉山に意見を仰ぐ。当たり前だが葉山は否定せず、可愛いと言っていた。
「比企谷」

「なんだ」
「これ勧めたのってどういう理由？」
「どういう理由って言われてもな……」
少し考えてみる。目についた……のは他のも同じ。じゃあデザインに理由があるのだろうが……、シンプル故に特徴がハートの部分しかない。ならハートが相模に似合うからか？
……違う気がする。てか考えるの面倒臭えな。何でこんなガチで考えてるんだよ。
「ハートが似合いそうだったから」
最終的には当たり障りのない言葉で濁す。この場合の濁すは俺の本心を、ということだから相模にはどう映るのかはわからない。まあ、あいつは俺を嫌っているから、十中八九プラスには受け取らないだろう。むしろキモいとかそういうのを言われること請け合いである。
「……あ、そ」
「え？」
「いや、だからあっそって言っただけじゃん。何？　褒めて欲しかったの？」
「いや、そんなことはないが」
そこで会話は途切れ、相模はネックレスをそっと戻す。まあ元々何かを買う気は無いのだろう。噂に聞くウインドウショッピングはそういうものらしいからな。
「じゃ、葉山君に褒めてもらえたの買ってくるね！」
「うん。じゃあ外で比企谷と待ってるよ」
そう言って相模はレジへと服を一着だけ持っていく。勿論俺が選んだネックレスは持たずに。
……いや別に凹んでないから。何も思うところとかないから。マジで。
それからというものの、基本は相模と葉山が会話をして、たまに俺

が入るスタンスのまま三時間が過ぎた。時刻はもう四時半頃であり、少し疲れた俺達はモール内のコーヒー店に入った。俺の隣には葉山、テーブルの向かい側には相模。俺と葉山はオリジナルブレンド、相模はなんたらかんたらフラペチーノを頼んでいた。
「葉山君のそれ、美味しい？」
「うん。だよな？　比企谷」
「ん、おう。まあ俺のとお前のじゃ糖分の量が違うだろうけど」
「あれは流石にうちじゃなくても引くから」
「何でだよどんなもんでも甘味は美味いって相場が決まってるじゃねえか」
「それでも砂糖入れすぎ。そんなん絶対美味しくない」
……こいつは何かっていうと俺を否定するよな。気持ちはわからないでもないというよりかはむしろわかるが。
「比企谷、それちょっと飲ませてくれないか？」
「は？　……いやまあ良いか。ほら」
葉山が妙なことを言ってくるが、別に躊躇うものでもないので渡す。そうしないと海老名さんに『うんうんそうだよね、ヒキタニ君も隼人君とキスするのは恥ずかしいもんね』と言われかねない。いや受け入れたらそれはそれで『うんうんそうだよね、ヒキタニ君も隼人君とキスしたかったもんね』とか言うのか。八方塞がりじゃねえか。
俺のお手製ＭＡＸブレンドを受け取った葉山は容器を口に付け傾ける。ゴクリと少量を流し込み、机に置き直す。特に不味そうといった表情ではなく、新しい味をみつけたと表現出来そうなものだった。
「意外とありだな……」
「え、ホント？　……じゃあうちも飲んでみたいかなー、なんて」
「いいんじゃないかな。どうだ？　比企谷」
「んあっ、なんだ？」
返してもらったコーヒーを煽っていると、またも不意に葉山に声をかけられる。適当にしか聞いていなかったが、飲ませろってことだよな？
「ん」

隣の葉山へ容器をスライドさせる。葉山はありがとうと言って、目の前の相模に渡した。

え？　相模に渡した？

「え、おいこれ相模が飲むのか？」

「なんだ、もしかして気にするのか？」

「いや確かに相手は相模だけどな……」

「は？　うちだって比企谷の飲んだ後なんか……」

言い終わる前に、相模はハッとして口を噤む。

……まあ言えないだろうな。〝葉山の後だったから〟飲んでみたい、なんて。あのタイミングは絶好のチャンスだったのだろうけど、気付く前に俺が飲んでしまったからな。ごめんよ相模。それでお前はこの状況はどうするんだろうな。

「……いや別にうちも気にしないから！　ありがと葉山君！」

「あ、おい待て」

俺の言葉を最後まで聞くことなく、相模は俺のコーヒーをグイッと飲み干した。全部いってドヤ顔を浮かべてはいるが、それ俺のだからな？　何で全部飲んでんの？　てかもう少し待ってたなら助け舟出したのに、やっぱバカなの？

「ふっ、どうよ比企谷」

「俺の分は？」

「……あっ」

「あっ、じゃねえよ」

流石の相模も少し申し訳なさそうにしており、視線をあっちこっちへ泳がせながら最後に葉山の方を向く。葉山は少しだけ笑い、口火を切った。

「じゃあ相模さんのを少しだけ飲ませてあげたら良いんじゃないかな」

「「……」」

そして始まる無言タイム。なんだ今日のこいつは。というか、何を企んでいるんだ？

「相模」
「……はいっ、これ!!」
勢いよく突き出されるなんたらかんたらフラペチーノ。俺と葉山が頼んだコーヒーとは違い、上の部分に馬鹿でかいキャップのようなものが付いているため中身は零れなかった。ただし、つまりこれはストローで飲むものであるということだ。
コップなら口を付ける場所で誤魔化せたんだろうがなあ……。
諦めて俺は少しだけ頂いた。名前が意味不明な横文字だったから頼まなかったが、正直俺のＭＡＸブレンドよりもかなり美味しい。砂糖を吐いてしまいそうなほどの甘さ、液体だけではないクリーム。仄かに香るコーヒーの味。

……ちょっと思った以上に美味しかったから、口を離したストローをもう一度付けて飲んだ。うん、美味いなこれ。

「比企谷キッモ!!!　ちょ、今の葉山君見た?!」
「う、うん……。今のは流石にちょっと……な?」
「いや、今のはそういうのじゃなくて、あの、えっとだな……」
素直に言えばいいのだろう。だがぼっちは突然の事態には弱い。俺はしどろもどろになって、よりキモさを演出しただけだった。
最終的にそのフラペチーノは間を取って葉山が飲むことになり、その状況が俺にはキツすぎてトイレに逃げ込むことになった。逃げるは恥でもないし役に立つ。良い言葉だ。
トイレ内は誰もおらず、用を足すためにチャックを下ろす。カフェインの利尿作用のせいか、いつも以上に出る。この快感ってなんなんだろうなあ。
手を洗い外に出ようとする。が、その前に少し立ち止まる。相模の声がしたのだ。席ではなくこの場所で誰かと話しているってことは、恐らく電話なのだろう。もう少しだけ待つかとドアから離れるが、ある一言でそれもなくなる。
「あ、えと、その……、すみません……忘れていました……」

忘れてた？　敬語ってことは、バイト先の先輩とかサークルの上回生か？

……それとも実行委員会の幹部以上の人か？

「あ、いえ……、ごめんなさい。今から当たってみます……」

そこで相模の声は止んだ。通話が切れたのだろう。ただ遠ざかる足音は聞こえなかったため、その場で立ち尽くしているのだろう。声色も恐る恐るというよりはむしろ絶望した後のようなものだった。

ドアを開けてテーブルへと続く道を行くと、案の定すぐに相模は見つかった。今にも泣き出しそうな顔で俯いており、俺は初め声をかけるのを躊躇ってしまうほどだった。

「相模」

すぐそばにいる俺にすら気付かないほど放心していたので、名前を呼んでみる。その瞬間相模の肩は跳ね、俺の顔を見て何かが決壊しそうになっていた。

「ひき、比企谷ぁ……」

恐らく最も弱味を見せたくない相手の俺にすら縋ってしまうほどの状況。俺はとりあえず軽く宥め、テーブルへと連れていった。

「おかえり、比企谷、相模さん。……どうしたんだ？」

それまで基本的には笑顔だった葉山の顔は一瞬で真剣なものに切り替わり、相模ではなく俺に訊く。その目は俺を疑っているものではなく、何があったのか一刻も早く知りたいという胸中が見て取れた。

「俺にもわからん。トイレを出たらこうなってた」

「うぅっ、えっ、ごめんなさいぃ……」

「まずは何があったか話せ。ずっと泣いてても何もわからない」

言いながら、これは葉山に怒られそうだなと感じた。だが葉山が怒ることはなく、俺に同調しているのか真剣な面持ちで相模の言葉を待っていた。

相模は泣きながらもことの次第を語り始めた。まず電話相手は実行委員長だったそうだ。内容は合同文化祭の説明会の欠員補充で、認識のズレがあったらしく十人必要らしい。期日はもう明後日に迫っ

ており、その人達を集めるという仕事を任されていたようだ。
ただ妙なことに、そう言った話は大体俺にも回ってくる。それは相模を信用出来ないからではなく、単に保険として伝えられるのだ。そして恐らく相模はその保険に慣れきっていたせいで、こんな事態になるまで放置していたのだろう。
「……バイトとかもあるだろうし、今から一年生の三分の二を集めるのはきつそうだな」
総勢一五名ほど。それにこの仕事自体面倒臭そうなものなので、事前に言えていても集められたかどうかわからない。
「なあ葉山、お前はどう思……う？」
俺が言い淀んだ理由。それは葉山には似つかない表情にあった。

――怒り。思わず言葉をかけるのを躊躇ってしまうほどの。

「相模さん」
あいつが怒るところを見たのは数える程しかない。ただし一度目に見た文化祭の時の怒りとは種類が異なり、激昂というよりは静かな怒り、その中には落胆でさえも見えた。
「……また同じことを繰り返すのか？」
葉山のそれは、俺が見たことのある感情の中でも、或いはおよそ葉山の人生の中でも、最も冷たいものだった。

１０話

「葉山……君？」
　相模は怯えた声で葉山を見上げる。重い空気はコーヒー屋の店員にも伝わり、遠くからおろおろとしている。
　端的に言って、葉山らしくない。これが二度目と言わず複数回やらかしているのなら葉山だって怒るだろう。それは怒りをぶつけるのとは異なり、相模に成長を促すため。
　だが、今はどうだ。
「相模さん、まずは問題を解決するよりも君の愚かさを自覚した方が良い。どうせ俺と比企谷に頼るつもりなんだろうが、それはもう君のためにならない」
「え、えっと……」
「こういうことを二度も繰り返す人は嫌いなんだ」
　……まるで俺のやり方。それがまず初めに去来した言葉だった。
　相模に成長のための思考を促すのではなく、自身にヘイトを向ける。〝嫌いなんだ〟なんて今は関係のない話だ。
　葉山の意図がわからない。とりあえず、俺は静観を続ける。
「……まあ、嫌いは言い過ぎたよ。でも相模さん。君のやっていることは高校生ですら回避出来る愚行なんだ」
「……」
「それに、あの頃誰に助けてもらったのかも気付かないままだし」
「へ……？　で、でもあの時は葉山くんが……」
「相模さんは盛大にやらかしたのに、何で同情してもらえた？　普通なら糾弾されないか？」
「葉山」
　堪らず制止する。葉山はなおも怒りを滲ませた表情で、一瞬気後れしてしまうほどだ。
「今それは関係ないだろ」
「否定しないってことはそういうことなんだろ？」
「事の本質は相模のやらかしたことの解決策だ」

「違う。二度目の意味を比企谷は考えていない」
ぐっ……。
言い返せない正論。言い淀んでしまう。
「相模さん」
「はぃ……」
尻すぼみな返答は何とも弱々しい。
「これ以上は怒らないから安心して。問題も解決する。ただね、二つだけ覚えておいてくれ」
二つ。瞬時に理解した俺は、しかし止めることは無い。
恐らくだが、これが葉山の今日の目的なんだろう。思いがけず言えるタイミングが回ってきたから流れに乗じて言った。そうとしか考えられない。
……俺を売って、一体何がしたいんだか。
「一つはもう二度と同じミスをしてはいけない。これは相模さんの交友関係すら破壊しかねない。これを聞いたのが俺と比企谷だったから良かったけど、大学の友達みたいな薄い人達だとすぐ離れていくよ」
まるで葉山らしくない、先程も言ったが俺のような発言。かつての葉山だと確実に友人のことを〝薄い人達〟なんて言うわけもない。
相模は小さく頷いた。
「もう一つは……うん。ごめん、やっぱり今じゃないや。忘れてくれ」
「はっ？」
「何でお前が驚くんだよ、比企谷」
いや二つって言ってもう一つ言わないとか俺じゃなくても驚くだろ。相模も相模でビックリしてるし。
というかなんだその仕方ないやつだな、と言わんばかりの顔。何のつもりでやれやれとかやってるんだ。
「欲しがりかよ」
「葉山らしからぬ発言だな」
「心配しなくても、そのうち言うよ」
確証は持てないが、恐らく葉山のもう一つの言いたいことは『君を

救ったのは俺ではなく比企谷だ』だろう。先程も似たようなことは言っているが、覚えておけという意味で繰り返すはずだ。
その意味が、俺にはまだ理解出来ていないのだが。
「とりあえず比企谷、相模さんを家まで送ってあげてくれ」
「お前は？」
「知り合いに当たってみるよ。多分来てくれるはずだ」
友達ではなく、知り合い。果たして今の葉山に友達は何人いるのか、訊いてみたくもある。
「ほら、相模」
俺は財布から取り出した二千円をテーブルに置き、呼び掛ける。相模は無言で立ち上がり、とぼとぼと店の外へ歩き出す。
俺も後ろからついて行くが、立ち止まり。
「……いつの間に仮面捨ててたんだよ」
背を向けた状態で言葉を残す。
「着脱式って気付いただけさ」
自嘲ではない嘲笑。だがその矛先は俺や、まして相模でもなく、恐らく仮面越しに見た友達相手（知り合い）。
やはり、あの頃の葉山とは根本的に違う。何がそうさせたのだろうな、本当に。
最後に出ていく時、葉山は小さく息をついた気がした。

駅までの道や電車内でも相模は黙ったままだった。降りてからもずっと閉口している。
俺と相模以外辺りに人はおらず、コツコツと足音だけが響いていた。
「比企谷」
そんな時、相模が初めて口を開いた。
「何だ」
言ってから、少しだけ焦った。今みたいな素っ気ない返し、気落ちした相模にはキツかったかもしれない。

「うち、馬鹿だね」
「……そういうのは求めてくれるな。俺は馬鹿だと思った相手には割とそうだと言う方だ」
「言わない相手いるんだ」
「まあ、雪ノ下相手とかだと裏があるのかもとか考えてしまうわな」
そんな方法をあいつがとるとは思えないが。
「そっか」
それっきり、相模はまた黙ってしまう。そろそろ降車してから十数分ほど経つ。こいつの家がどこかは知らないが、結構歩いたんだ。もうすぐ着いてしまってもおかしくない。
「……うち、何にも変わってないなぁ……」
相模の独り言は、言葉尻にかけて徐々に潤んでいった。かけてやれる言葉が見つからない。文字通り、俺は相模のどこも変わったとは思えないから。

だから代わりに、出来ることはしよう。その宣言だけでもして安心させよう。元はと言えば、奉仕部が撒いた種でもある。

「俺がなんとかしてやるから安心しとけ」

……どうしちゃったんだろうなあ俺。普段なら絶対言わないのに。
「……ふふっ、葉山くんがやってくれるって言ってたじゃん」
「ぬ、いやまあそれはそうだが……」
「……ありがと」
相模は髪の毛を控えめにいじり、そっぽを向く。その姿はまるで、恋する相手に恥じらう様子。
勿論、俺に対してそんな感情を抱くわけはないのだが。
「ここまでいい」
「……あ、そ」
俺は特に何も言わず、それを受け入れる。一人でいたい。そんな思いはわざわざ言葉に出さずとも伝わってくる。

「比企谷に家とか知られたくないしね」
「了承してんだから追い討ちすんなよ……」
「じゃね、比企谷」
相模は最後に俺を覗き込んで、駆け足で進行方向へ走り出す。ふわりと香った匂いは今まで気付かなかった五感。果たして誰があいつのことをしっかり見てたのか、懐疑的になった。

相模の姿はもう見えない。それは先に進んだからか、後ろにいるからか。主観で変わる答えなんて意味なさそうだけどな。

◇◇◇

それから一週間後。相模がやらかした合同文化祭の説明会も終わり、ところ変わって実行委員会本部。今日は件の説明会の反省会だそうだが……。
「ね、説明会なんてあったの？」
隣の陽乃さんがそう尋ねてくる。近い近い、柑橘系の香水が漂ってくるし胸も当たってる。あとなんか暖かい。
まあだが問題はそこではない。そこではなく、これが一年から四年まで全員揃っての反省会だということだ。当然その存在すら知らない人が大半。こうして陽乃さんが訊いてくるのが何よりの証拠だ。
「……まあ、確か二年と一年だけで回したそうですから」
「君は知ってたんだ」
「そんなことは一言も言ってませんよ」
「顔に書いてあるよ」
いたずらっぽい笑顔。俺の頬に指でちょんと触れる。その行動一つでどれだけ俺の心臓が跳ねているか、教えてあげたいものだ。
「仕切りは二年の代表と相模みたいですね」
「うわ、見てよ比企谷君。相模さんカチコチ。助けに行ってあげれば

？」
副代表なんだし。そんな飄々とした言動はいつもの彼女。自然と笑みが零れる。
「うわ、気持ち悪い笑顔。私じゃなきゃ引いちゃうね」
「……んなことより、始まりますよ」
二年の代表が適当な口上を述べる。そこからすぐに本題に入った。
相模は黙ったまま、気まずそうに俯いている。
……一年生の殆どが合同文化祭の説明会を知らない状況、その理由に皆が気付くのはいつなのか。中でも事の次第を知っている人間の一人である委員長は静観を保っていた。
「……以上が大まかな流れです。あの、相模さん。そう言えば説明会に来てくれた人なんだけど」
大体の説明や報告が終わると、話題は一年へと移る。俺も説明会には行ったが、もの見事に実行委員はいなかった。俺と相模と葉山、あとは知らない連中ばかり。そのことについてはやはり二年も不思議に思っていたようだ。
「え、えと……それは……」
誤魔化そうにも、何から誤魔化せばいいのかわからない。そんな焦りは周囲にも伝播し、疑惑の目は広がる。とりわけ一年のそれは委員会の中でも強いものだった。
「相模さん」
膠着状態。打ち破ったのは、険しい顔をした葉山。全員の目が葉山に向かった。
一体何を企んでいる？　お前は事情を知っている側だろ？
と、そこまで考えたところで気付いた。知っているからこそ、言えることがある。
「代表になるのがダメだったら断っても良かったんだよ？」
「え……？」
「だって連絡が遅れたせいで一年に情報が行き渡ってなかったんだよ

ね」
表面上は心配する体で、しかし完全に責任の所在を明らかにする言い方。
今の葉山は、似合わない黒の何かを纏っているような気がした。
「先輩」
葉山の言うこの場合の先輩とは、二年の代表のことだ。
「な、何かな？」
「代表って辞任することは出来ますか？」
その一言で、本部内は一気にざわめき出した。隣の席のやつとひそひそ話す者、大きな声で確認し合っている先輩連中、単純に目を丸くしている者。
そしてそれでも、委員長は静観を続けていた。
「……出来るんですか？」
俺も一応陽乃さんに訊く。陽乃さんは少しウキウキした様子で答えた。
「前例はないけど、代理を立てるんなら可能だろうね。別にそんなに形式ばったものでもないし」
つまり本人の一存によるわけだ。それはつまり、多数決で決めるなどというクソッタレな選択肢を取らなければならないわけでは無いということ。
「辞めるのも手だよ」
「あの、その……」
どよめきが場を支配するまま、葉山は相模に迫る。脅してはいないが、これは脅迫も同然。
……ふう。
俺はもしかして相模のことを心配しているのか？
俺はこんなにも義理堅いやつだったのか？
俺は相模を助けたいのか？
まあ、違うわな。

「……チッ」

ただの舌打ちなのに、本部全体に響き渡る不快を示す音。水を打ったようにその場は静寂に包まれた。

「初めから言えよ、葉山。俺が悪いって」

途端、全員に浮かぶ疑問。隣(陽乃さん)からはふふっと聞こえ、今にも泣きそうな相模はまるで未確認生物を発見したような目で俺を見る。

そして葉山は薄く笑っていた。どうやら正解のようだ。

「何がだい？」

「その話は相模じゃなくて俺に来てたんだ。知ってて煽ってんじゃねえよ」

委員長は黙ったまま。好都合だ。本当は相模に行った話だが、訂正をしないのならばやりやすい。

「じゃあ初めから名乗り出たら良かったじゃないか」

「擦(なす)り付けれると思ったんだよ」

「なら最後まで黙ってたら良かっただろ。何で今更？」

……こいつ、本当に何を言わせたいんだ。

「聞こえよがしに喧嘩売ってただろうが」

俺と葉山の険悪なムードは、既にこの場を飲み込んでいる。普通の議論ならいざ知らず、一触即発の雰囲気は緩い態度を許さない。

「比企谷がそんなに好戦的だとは知らなかったな」

「売られたら買うに決まってんだろ」

「一つ忘れてるけどね。誰が説明会の人員を集めたと思ってるんだい？」

「……うるっせえなホント。というか相模、お前だって曲がりなりにも代表なんだ。適当な言い訳して逃げ切っとけよ」

埒が明かない諍い。俺は締めに入る。
「てかな、そもそも委員会自体面倒臭いんだよ。一回のミスでこんだけ言われるとかダルいにも程があるだろ。……うん。すいません、俺辞めます」
葉山は止めもしなければ行けとも言わない。ただ静かに、全体を見渡している。
「……えっと、比企谷君だっけ」
そこでやっと委員長が口を出す。咎めるような声音でも、怖がっているような様子も見られない。
「ごめん、そういう特別扱いは認めてない。それを認めちゃうと後に続く人が出てしまうから」
「良いじゃん、やめさせたら」
「……陽乃さん」
思わず名前を口にしてしまう。ここで陽乃さんが出てくるのは想定外だ。
もっとも、良い意味でだが。
「どうせ副代表やるんなら今回の実績もある隼人がやればいいんだし。ね？」
「いや、でもそれだと……」
「じゃあこうしよう」
陽乃さんは胸の前でパン、と手を合わせる。
「辞めたい人は私に言いに来てよ？　今回の比企谷君のような正当な理由がなかったら受理しないけど、納得出来るだけのモノがあるんならいつでもどうぞ」
「……わかりました。じゃあ比企谷君、君は今日から委員会を降りて構わない。今までお疲れ様」
「お疲れ様でした」
何とも強引に陽乃さんが纏めあげた。委員長は何か弱みでも握られているのか。そう思わずにはいられない程、委員長は陽乃さんに従う。言われたみると一年の代表を決めた時だって、彼は陽乃さんに従っていたじゃないか。

俺はそそくさと荷物を手に取り出ていく。止める者は誰もおらず、無言のまま俺は本部を出た。

名残惜しさはない。だが気掛かりなことは幾つかある。

一つは相模の今後だ。少しおかしかったとはいえ葉山がいるんだ、悪いようにはしないはず。それでもあの様子を見れば気にならないはずもない。

まあ、一応ヘイトは全部俺に集めた。いつぞやの文化祭の時のように、これで相模は同情されるべき悲劇の代表になったはずだ。

そしてもう一つは、当たり前だが葉山のこと。どこか誘導している物言い、時折見せた不気味な笑み。何がしたかったのか。今の結果起きたことなんて、俺がここを辞めたこととあいつ自身の株を下げたこと以外に何があるか？　ともすれば相模の中では俺の株が上がっているまである。

……何回目だろう。本当に、あいつは何がしたかったんだ。

11話

「比企谷!!」
　大きな声で引き留められたのは、辞めた委員会の帰り道。駅へと続く道にはちらほらと大学生が散見される。
「相模」
　走ってきたのだろう、肩で息をしている。セットされていたであろう髪は若干崩れており、額には汗が滲んでいた。
「あの、あのさ！　さっきのことなんだけど……」
「気にすんな。ちょうど辞める理由が出来て良かった」
「いや、でも……」
　相模は何かを言いたそうに口を開いてはその言葉を飲み込む。言い難いことなのか何かはわからないが、待つ義理もない。俺は無視して歩き出す。
　と、そこでようやく相模が声を上げる。別に催促したつもりは無いが、半ば条件反射的に立ち止まった。
「何で比企谷、うちを助けてくれたの……？」
「は？」
「いや、だって本当はうちがやったのに……」
「……」
　追いかけられるとは思っていなかった（もっと言うともう会う機会はないと思っていた）ので、何も考えていなかった。思わず黙ってしまうと、なぜか妙な間が空いた。
「……なんだろうな」
　上手い言い訳が出てこない。というかそもそも言い訳するようなもんでもないはずだ。
「うちのこと……もしかして、好き、とか？」
「いやねえよ」
　なぜか頬を染めて上目遣いで訊く相模。その感じだとお前が俺のことを好きに見えるぞ。
　……いや、マジでないよな？

「……、そっか」
心なしか残念そうな――いやいや、そんな顔してねえ。そもそも高校の時点で嫌われているんだ。多少優しくしたところで評価が覆るわけじゃない。
「比企谷」
再び、俺の名前を口にする。熱っぽい視線は真っ直ぐ俺を射抜いている。
「滅多なことは言うなよ」
「意味わかんない」
「いや、意味わからないじゃなくてだな」
「葉山くんから聞いた。高校の文化祭も、本当はうちのことを思ってしてくれたことだったって」
あいつ……なんてタイミングで言いたかった二つ目のことバラしてんだよ。そんなの今言ったら、恋に恋する相模なんて勘違いしてしまってもおかしくないだろうが。
……それともむしろあいつの狙いはこれなのか？　だとしたら、何のために？
「そんなこと知っちゃったら嫌えないじゃん」
「思い上がりだ。あれは奉仕部の依頼であってだな」
「じゃあ今回は？　あれも奉仕部？」
「いや、違うが……」
「なら良いじゃん。比企谷」
三度名前を呼ぶ。心の中でどデカいため息をつく。
「うち、比企谷のことが――」
「――あっはははは!!　それで？　比企谷君はＯＫしたの？」
陽乃さんのバカ笑いがリビングに響く。日の落ちた頃、陽乃さんにスマホで家へと呼ばれたのだ。委員会が終わるなりすぐに飛び出し

て行った相模を見てピンと来たそうだが……、それにしてもこの人は本当に鋭い。開幕第一声が「告白された？」だもんな。怖えよ。あと怖い。
「ＯＫなんてするわけないでしょう。普通に断りましたよ」
「なんて言ったの？」
「いや、まあ普通に」
「なんて言ったの？」
「ｂｏｔかあんたは」
「なんて言ったの？」
「……」
誤魔化せない。こういうめちゃくちゃな強引さがまかり通ってしまうのが、陽乃さんの特別の一つだ。

「すまん、とだけ」
「ふーん」

ソファに座っていた俺の隣にすすっと移動してくる陽乃さん。漂ってくるのはいつもの甘い匂いだ。
「妬きましたか？」
「それはもしかしてお姉さんに言ってるのかな？　だとしたら君は今すぐ穴を掘ってくるべきだよ」
「それは恥ずかしくてですかね。でもだとしたらこの手は何でしょうか」
俺の手の甲に重ねられた陽乃さんの右手。左手が柔らかい熱を帯びていく。
「何だと思う？」
「嫉妬心」
「私、一回でも君に好きって言ったっけ」
「口にしていないのはお互い様ですよ」
「言ってくれないの？」
「言わせたいんですか？」

「そりゃ私だって乙女だし……んっ」
重なった手はそのままに、口付けをする。お互いに薄目を開けているから至近距離で視線が合う。俺も陽乃さんもどこか笑いそうになりながら、唇を重ねていく。
ふ、と数センチだけ離れる。
「ねえ比企谷君？」
温かい吐息が口元にかかる。
「はい」
真っ直ぐ、じっと陽乃さんの目を見つめる。
「相模ちゃん、泣いてた？」
笑みは消えていた。
「いえ。代わりにもうちょっと考えてみるとは言っていましたが」
陽乃さんの蠱惑的な雰囲気は変わらない。
「そっか」
返答を求めない呟き。再び俺は顔を近付ける。

――が、その行く手を陽乃さんの指が阻む。ぷに、と人差し指が俺の唇に触れた。
「キスは待って」
「え、何かめっちゃ恥ずかしいんすけどそれ」
「君は本当に私のことが大好きだね」
「言わせたがりですね」
「どうしてもキスしたいなら、私と付き合って」
言葉だけみると、少し上からではあるが完全に愛の告白。少しだけ身構えた。
答えは勿論決まっている。だが、その前に。
「理由は？」
「言わせたがりだね」
「意趣返しのつもりですか。そうじゃなくて、何か別の理由があるん

でしょう」
「そう思う理由は？」
「多分俺は妹よりもあなたのことを知ってますよ」
「……答えになってないね、それ」
　そう言って陽乃さんは呆れたような笑顔を浮かべた。ただし、少しだけ満足そうだ。
「二つ。何だと思う？」
「相模が次告白してきた時に言い訳として使わせるため」
「惜しい」
「それはつまり俺への独占欲でしょう」
「……ホント、バカなんだから。何でもかんでも見透かせば良いってもんじゃないからね？」
「あと一つですね」
「……嫌いだよ、君は」
　そんな気はさらさらないくせに。意外とわかりやすい人だ、陽乃さんは。
「まああと一つは君が知り得ないことなんだけど」
「なら教えてください」
「私のお見合いの断る材料」
「……そんなの、本当にあるんですね」
　俺はそれまですぐ側にあった陽乃さんの顔から距離を取ろうと離れる。
　が、瞬間後頭部を引き寄せられる。そして荒っぽく口唇が触れ合う。
「ん……ふっ、ぅ……」
　苦しそうに、陽乃さんは俺を貪る。後頭部から俺の頬へ滑らせた手は少し湿っていた。緊張から……いや、この人のことだ。そんなわけないか。
「つぷは、……どう？」
「何がですか？」
「キス」

「陽乃さんからしてきてくれたってことは、付き合うって認識で良いですね？」
「良いよ」
　サラッとそう言い放った陽乃さんは、一切の曇りのない真剣な表情だった。
「だから、比企谷君は私のものね」
「わかりました」
「……その代わり、私も比企谷君のものだから。死ぬ時は一緒だよ」

　死ぬ時は一緒、ねえ。

「春日狂想ですか」
「愛する者が死んだ時は自分も死ななきゃダメ、だったね。前にもこんな会話しなかった？」
「しましたよ。あなたと初めて会った日」
「言い得て妙、なんて言うと思った？」
「事実に対して言い得て妙、とは確かに使いませんね」
　陽乃さんはそこでふう、とため息を漏らした。軽い区切り。会話はそこで途切れた。
「お風呂かご飯、どっちが良い？」
「……誘ってこないでください」
「第三の選択肢を選ばないとお姉さんに飽きられちゃうもんね？」
　その挑発には何も答えなかった。代わりに陽乃さんの頬に手をやり、こちらへ顔を向けさせる。相変わらずの大きな瞳、それを彼女はさらに丸くしていた。予想外だったのだろう。
　俺は空いてるもう片方の手で彼女の目を塞ぐ。どけると、律儀にも陽乃さんは目を閉じていた。

　そして、その愛らしいキス顔を俺は陽乃さんが目を開ける十秒までの間ずっと眺めていた。

痺れを切らした陽乃さんが小さく目を開ける。そして目に入るであろう、俺の少しニヤついた顔。

「……別れる」

本当に、可愛いところもあるもんだ。

◇◇◇

翌日。ある一通のメールが届いた。

送り主は見覚えのないアドレス。だが、本文には誰なのかわかるようご丁寧に記載されていた。

雪ノ下の母です。

俺は直ぐに身構え、メールを読み進めた。曰く、陽乃さんのことで話がしたいそうだ。呼び出しの時間は今日の昼過ぎ。場所は指定された住所。調べてみると、そこはお高いカフェだった。

財布には余裕のある金額を突っ込み、刻限の三十分前に着く。驚いたことに雪ノ下母ことママのんは既に店内でコーヒーを飲んでいた。和服には似合わないが、しかし彼女の風格がそれを許さない。思わず認めてしまう。稚拙だがそうとしか言い様がなかった。

「あら」

俺は努めて冷静に店内に入り、一人テーブル席で優雅に過ごすママのんのところへ移動する。どうやら顔は覚えられていたようだ。俺を見るなり声を漏らす。

「かけなさい」

丸椅子に備え付けられた二つの椅子。俺は無言で頷き、椅子に座った。

「単刀直入に言うわね。陽乃と距離を置いてくれないかしら」

「それはまたなんで」

「許嫁よ。あの子は優秀だけど、男ではないもの」
「時代錯誤も甚だしいですね」
「それはうちの重役に言ってもらえるかしら」
たかだか二言三言。たったそれだけの言葉の応酬で、この人には俺と取り合う気がないことがわかった。
「一応ハッキリさせておきますが、俺は陽乃さんと離れたくありませんよ」
「どうせ友達なら雪乃がいるでしょう」
「恋人です」
まさかこんなに早くこのことを口にするとは思わなかった。そして、ママのんの鉄面皮が崩れたのもこの時だった。
「あなたが……？」
「ええ。なんなら陽乃さんにでも確認しましょうか」
俺の強気な態度はその事実に確信を持たせたのか、小さく首を振っていいえと拒否する。
暫しの無言。ママのんは自身の顎に手をやり、何か考えている様子だ。それとももう考えはまとまっていて、どう言おうか悩んでいるだけか。どちらにせよ俺は彼女が口火を切るのを待つだけだ。
「……、あなた。それはどちらから？」
「どちらと言えば、陽乃さんですね」
「そう。でもそれが陽乃のためになるとは限らないわよ」
「俺も付き合いたいと思ったから付き合う。そこには陽乃さんのためなんていう不純物は混じっていません」
「そんなことは関係ないわ。私は単にキャリアの話をしているの。仲の良い相手会社の息子さん。彼、海外留学もしてて今は自分の会社まで持っているのよ」
まるで自分の自慢話のように、彼女は続ける。
「そんな輝かしい方か、はっきり言ってどこの馬の骨かもわからないあなた。どちらがあの優秀な子に相応しいのかしらね」
「相応しさだけが隣にいる権利ではないと思いますが」
「……そうそう、あなたが別れないのならその方は雪乃に回すことに

するつもりよ」
ピクリ。隙を見せてはいけないのは理解しているが、思わず眉が上がる。
それを目ざとく見つけたママのんは、少しの笑みを浮かべて。
「陽乃が優秀でい続ける理由、知らないとは言わせないわ」
その一言に、俺はまるでナイフを渡されたような錯覚に陥った。
剣山の上に吊るされているのは、何も知らない自由な雪ノ下と落ちることを望む陽乃さん。どちらかを切れという、残酷な二者択一。
まあでも、冷静に考えてみろ。
そんなもん、陽乃さんを切るに決まっているだろう。

12話

今日最後の講義である三限。いつも通り鶴岡の隣に座り、興味のない一般教養を聞き流していた。
「比企谷君、何か元気ない？」
と、そんな折唐突に心配される。いきなりのことで、俺は何も言えなかった。
「何だか、今日は雰囲気がしっとりしてて」
冗談を言っている様子はない。本気でそう思っているのだろう。

理由ははっきりしている。勿論、陽乃さんに昨日のママのんとのやり取りの結果を伝えなければならないことだ。付き合うと言った翌日に振る。俺じゃなくても気が滅入るはずだ。
「……まあ、色々な」
「話せない？」
「言ったところでしょうがないからな」
「愚痴は言うだけでも心が晴れるよ」
俺にはもう慣れたのか、最近はこうやって踏み込んでくることも多くなった。良い傾向なのだろう。
「じゃあ端的に」
「はい！」
「昨日付き合いだしたのに今日別れなきゃならんことになった。正直切り出し方がわからん」
「……さいてー」
「端的に、つっただろ。やむにやまれぬ事情ってのがあるんだ」
「それってもしかして二股？」
「陽乃さん以外に好きになる人なんかいない」
あの人本人の前でなければ、こうしてさらっと〝好き〟を明言できるんだよな。陽乃さんの前で言えないのは、多分照れとかじゃなくて意地。
「羨ましいなぁ……」

「……」
「あ、えと、そそ、そうじゃないから！　別に比企谷君のこととか全然好きじゃないから！」
「それはそれで傷付くぞ」
「うっ、ええっとね……」
　いやまあ、意図は何となく理解出来ているが。どことなく由比ヶ浜を連想させるな、こいつは。
「それだけ好きになってもらえる、その、陽乃さん？　凄い果報者だなあって。前の新歓の時の綺麗な人だよね」
「その人だ。まあ見た目も確かにめちゃくちゃレベル高いわな」
「見た目も」
「……あの人の本質はそこじゃないんだよ。それで俺はその本質に魅入られた、というか。……なんで別れなきゃならんのにこんな惚気みたいなことしてるんだ俺」
「でもさっきよりは顔楽になってるよ」
　言われて省みる。認めるのは癪だが、確かにさっきのような鬱屈した感情は薄れていた。
　こいつも極度の人見知りなだけで、本来はこういう気を使えるやつなんだな。
「でさ、別れなきゃダメな理由はやっぱり話せない？」
「悪い」
　短い返答。だが鶴岡はそれだけでしっかりと線引きを理解した。
「わかった。吐き出したくなったら言ってね」
　鶴岡は最後にそう残してくれた。こいつの人となりを知るまでは長いが、知ってみるとやはり良いやつだ。
　願わくば、俺がいない時でもこうやって誰かと話せれば友達も増えるのにな。まあ俺が鶴岡の友達なのかは疑問だが。

◇◇◇

講義が終わり、鶴岡と共に正門を出る。駅までは鶴岡とも同じなので、いつもはこうして二人で帰っているのだ。
だが、今日はそうもいかないらしい。
「比企谷君！」
「陽乃さん」
衆目に晒されるのも厭わず、陽乃さんは正門の真正面で待っていた。彼女の容姿や雰囲気も相まって、かなり注目されている。
「じゃあ私は行くね。またね、比企谷君」
気を利かせた鶴岡はそれだけ言って歩き出す。しかし鶴岡が去ってもその場の注目は止まず、俺と陽乃さんは顔を見合わせた。
「……場所変えましょうか」
「あら、そう？　私は別にみんなに見られてても良いけどね」
「ぼっちに強要するもんじゃありませんよ」
「私も一緒だけどね」
「……どっちの意味にしても、俺にこの状況は居心地が悪いです」
この場には俺だけじゃなく陽乃さんもいる、その意味で『私も一緒』。もしくは陽乃さんも同じくぼっちという意味で『私も一緒』。
ただし後者は成り立ちが違うが。俺は環境に適合しなかったから。陽乃さんは周囲とは一線を画す能力を持っていたから。結果だけに親近感を覚えるのは馬鹿のやることだ。
俺と陽乃さんはその場を移動し、あてもなく静かな場所を目指す。流石の野次馬共もついて来てまで見ようという輩はいないようだ。
少し歩いて見つけた場所はいつぞやの病院傍にある桜並木。今は全て葉桜になっており、新緑が風に揺られてさわさわと音を立てている。
「懐かしいね」
「ええ。と言っても、まだ先月の話ですが」
「何か、君といる時間は長く感じるや」
「楽しくないって面と向かって言われるのは慣れてます」
「逆。私には楽しくない時間しかなかったから、今みたいな楽しい時

間は濃いんだよ」
　まるで答えになっていない発言。意味だって通っているか危ういが、今のに対しては恐らく意味を求めること自体無粋。
　単に長く感じる。それだけでいい。
「やっぱり患者さんも割と居るね」
　車椅子を押されている人、看護師さんと共に歩く老人、病衣を身に纏った二人の子ども、後ろを歩く白衣の医者。

　瞬間、鼻腔に届く蠱惑的な匂い。橋の上で出会った、あの時と同種のもの。俺は思わず目を見開いて陽乃さんを見た。

「ん？　どうしたの？」
　が、陽乃さんではない。彼女からはいつもの甘い香りしか漂ってこない。となると、この匂いの源はもしかして病人だろうか。だが彼らと陽乃さんに共通点なんて見いだせない。
「いえ、何でもありません」
　平静を装ってそう伝えるが、果たして陽乃さん相手に通じたのか。まあ恐らく、そんなことはないのだろう。だが自分でも突拍子のないことだったため、彼女に思い当たるはずがない。
　何かあったのだろう。恐らくそれだけしかわかっていない。
「初デートにしては悪くないチョイスかな？　これで映画とか誘ってたら幻滅だったよ」
「……」
「さっきから考えることが多いね」
「いえ、まあ」
　陽乃さんはやはり普通にデートだと思っている。似たようなことなら付き合う前にだって何度も、それこそキスやそれ以上のことだって何度もしている。
　それだけに、俺はどう切り出そうか悩む。
「初デート、ですか」
「そうだよ？　まあそれっぽいのはいっぱいしてたけどね」

「あえて名前を付けるのなら、これは初デートもですがラストデートでもあるわけだ」
極力、俺は本心を隠した起伏のない声を意識する。
隠した本心は〝別れたくない〟。少しでも顔を覗かせてしまえば、恐らく爆発してしまう。
「……そう」
陽乃さんは優秀だ。もう自分の事のように理解していること。それだけに、他のやつのように聞き返してくることなんて殆どない。
今回にしても、陽乃さんは即座に理解した。
「理由は、やっぱりお母さん？」
「知ってたんですか」
「いや、君が私から離れるなんてそれくらいでしょ？　というか告白した時点でそうなるかもとは考えてたし」
「好きとは言われてませんけどね」
「言わせたがり」
お互い軽く息をつく。空気が軟化することはない。
「にしても、そっか。比企谷君なら……とは思ったんだけどなぁ」
「買い被りすぎです」
「その言葉はそう思ってた私を疑うことになるよ」
「俺に関してだけ言えば、俺の方が知ってますよ」
「私が誰かに負けるはずないでしょ」
……相変わらずの荒唐無稽。そしてそれを押し通せる程の特別。
雪ノ下も手がかかるやつだ。そんな彼女をしても、自己犠牲を伴わなければ救えないとは。そういった意味では完全に妹属性を持ってるよな、あいつ。
「……嫌だなぁ」
それは、今までのどの言葉よりも感情がこもっているように聞こえた。多分俺の思い上がりでもない。
――そして、病人だけではなく陽乃さんからも漂いだした〝あの時〟の匂い。

「……また目見開いてる。何？」
「気付かないんですか？　俺が初めてあなたに惹かれた匂いですよ」
「匂いは禁止。せめて香りって言って」
「すみません、良いですか」
俺はずい、と陽乃さんへと近付く。それは初めて彼女の家へ招かれた日と同じ、匂いを嗅ぎたいという意思表示。
しかし陽乃さんは体の前に手を置き、俺の接近を止める。
「ダメ」
「……頼みますよ」
「じゃあ私と別れないで」
陽乃さんは本気の表情でそう言っている。雰囲気からも読み取れる。それほど許嫁が嫌なのか、本当に俺の事を好いてくれているのか。
恐らくどちらもあるだろう。だが一番の理由は〝自分の人生を勝手に決められたくない〟。聞くまでもない。陽乃さんはそういう人だ。
「なら良いです」
諦めて離れる。距離を取ると同時に陽乃さんの手が少し前に出た気がした。
「……もう良いや。ごめんね、迷惑かけて」
「いえ」
「じゃあね」
またねではない、じゃあね。そういうことなんだろう。
立ち去る陽乃さんを、俺は追いかけない。資格さえ――
「――あ」
思わず漏れた声。しかし陽乃さんは止まらない。止まるはずがない。

そう思ったのだが、どうやらあの人もちゃんと人間のようだ。陽乃さんは足を止めて振り返った。その瞳に一縷の希望が覗いていることは、口にはしない。

「もしもこのまま付き合い続けたら、名前で呼んでくれますか？」

それはいつかの日にか、彼女の放った言葉。

『呼んで欲しいんなら私に認められなきゃ。ね？』

陽乃さんから発せられる、俺を惹き付ける香り。なぜか一瞬だけ薄まったそれは、再び濃度を増して。

「私を救ってくれたら、名前で呼んであげる。比企谷君」

そしてその現実は変わらない。俺は、彼女にとってはどこまでも〝比企谷君〟だ。

陽乃さんが俺から離れていく。見えなくなるまで、俺は彼女の歩く道を見ては、轍に目をやる。

俺が振ったのにな。けれどこの状況はまるで振られた側じゃないか。

彼女の持つ特別。こんな時でもそれを押し通せる陽乃さんは、本当に、俺なんかには充分勿体ない。

そしてそれが自身を守る合理化だということも、俺は等しく理解している。

13話

自宅のリビングにあるソファで、俺は何をするでもなくテレビを眺めていた。ＢＧＭとして情報が入ってくる。

テレビの中で、アナウンサーは台風について熱く語っていた。それもそのはず、六月初旬という時期外れな今日台風が直撃しているからだ。外は猛烈な雨。雨粒が窓を叩く音は忙しなく響く。

陽乃さんを振ってから早くも二週間が過ぎた。今はもう出会うことはおろか電話やメッセージのやり取りすらしていない。鶴岡とは今も話すが、それ以外は基本的に前の生活へと逆戻り。それが普通だったとはいえ、寂しくないと言えば嘘になる。

俺だって、別れないで済むなら別れなかった。必要があるから別れたわけで、今だって変わらずあの人のことが好きだ。ついぞ伝える事は叶わなかったが、まあそれはお互い様か。

財布の中には返しそびれた陽乃さんの家の鍵。どうせなら次雪ノ下と出会った時にでも渡して貰えるよう頼むか。

……いや、何でもってるかとか説明するの面倒だな。てかあいつそもそも俺と陽乃さんがそういう関係だったってことすら知らないのか。何でも知ってるようなフリして、実は一番何も知らないってな。

そう言えば、出会った頃には世界を変える宣言とかもあったなぁ。だがそれが出来ると思わせられる人物はやはり陽乃さんだけで、雪ノ下でも葉山でも、まして俺でもない。

と、そんな時隣に置いていたスマホが振動する。どうせ広告メールで、間違っても陽乃さんからなんて来ない。

ドキドキすんなよ、俺。

メール欄には『葉山隼人』とあった。あいつからメールとか珍しい

な。相模との一件以来だ。
画面をタップしてメールを開ける。存外内容は淡白なものだった。
『今から会えるか？　場所は総武高の最寄り駅の近くの公園でどうだ？　あそこなら雨宿りしながらでも話せるだろ』
……今からねえ。外は大雨。風台風じゃないだけましか。
まだ午後の四時だっていうのに、既に外は薄暗い。空に広がる黒い雲は今にも落ちてきそうな重厚感を持っていた。
『着くのは五時くらいになると思うが良いか？』
普通にその公園へ向かえば二十分くらいで到着するだろうが、こんな天気の中だとそれも叶わないはずだ。外出の用意の時間も見ての五時である。本当に酷い雨だ。
『わかった。五時に公園の屋根付きの場所で頼む』
葉山の返信は迅速で、すぐに了承の旨のメールが届いた。
一体何の話なんだろうか。メールではダメで電話も使う気がない。それにこれほどの悪天候でも今日言わなければいけない、軽重で言えば確実に重いであろう話。
予想はつく。葉山との重い話なんて、陽乃さんか相模しかない。そして最近起こったことに鑑みるなら、陽乃さんの話だということはもう明白だ。
俺はテレビを消し、出かける用意を始めた。

◇◇◇

午後四時四十五分。公園には意外と早く着いた。葉山はいない。
外はやはり猛烈な雨で、傘は差してきたが既に全身ずぶ濡れ、靴なんてびちょびちょだ。肌に張り付く服は気持ち悪い。
「……寒っ」
冷たい外気は水に濡れた体を容赦なく刺す。こうも寒いと気分まで下がってくるな。それに太陽が隠れているため余計に気落ちする。

思い出したくないことまでふっと湧いてくる。
葉山が来たのは、それから七分程経った後だった。
「待たせたね」
「遅えよ」
見ると、やはり葉山もびしょ濡れだった。屋根の下に入り、傘を閉じて髪をかきあげる。一々行動が様になるやつだ。
「早速本題に入っても良いかな」
急いでいる様子はない。だが無駄話をするような気もないようだ。
俺は無言で首肯する。
「陽乃さんと関係を絶ったって聞いた。本当なのか？」
「ああ」
雨の音で声が届き辛いため、お互い大きめの声で話す。そのせいか、俺も葉山も少しだけ威圧的になる。
「振ったよ」
肯定とともに補足をする。葉山は果たして知っていたのだろうか。
「……告白されたんじゃないか」
「そんなロマンチックなもんじゃなかったけどな」
「じゃあ受け入れたなら良かっただろ」
「何イラついてんだよ葉山。そうするしかない事情があったんだよ」
「それが彼女なりのＳＯＳだってなんで気付かないんだ!!!」
ガッと胸ぐらを両手で掴まれる。しかし葉山の表情は憤怒というよりも、悔恨に彩られている気がした。
そんなに救いたいならお前が救えよ。いつも傍観者を気取りやがって。
「お前は何か行動したのか？」
「は……？」
「ＳＯＳを出される前から知ってたんならお前が助けろよ」
掴んできた腕を振り払うことも無く淡々と言い返す。だが葉山はそれでも俺の目をしっかりと睨み返していた。
「出来ないんだよ。俺には場を整えることしか出来ない」
「決めつけてんじゃねえよ。やろうともしてないくせにそう考えるの

は傲慢だ」
「……知ってるんだろ？　陽乃さんには婚約者がいるってこと。そして陽乃さんが駄目なら雪乃ちゃんに話が回るってことも」
葉山は掴んだ腕をゆっくりと離す。視線は俺の目から徐々に下へ落ちていく。
「シスコンのあの人だ、雪乃ちゃんの自由を守るためなら自己犠牲だって厭わない。……丁度、前の比企谷みたいな感じだよ」
「だとしたらやっぱり付き合い続けるのは陽乃さんの意志に反する」
「……ああ、なるほどな。比企谷が犠牲にしたのはそこか」
どうせ陽乃さんと付き合いたい俺の意思を犠牲にした、とでも思っているのだろう。妙に納得した顔に俺は殺意さえ芽生えた。

そうだよ、悪いか。他に犠牲に出来るもんなんてもうねえんだよ。

「だとしたら比企谷、やっぱりお前は陽乃さんと付き合うべきだ」
「話聞いてたのか」
「雪乃ちゃんは俺が守る」
「どうやって」
「親父に駄々をこねたら見合いの一つや二つ、セッティングしてくれるだろうさ」
つまりセカンドプランの相手を先に決め、俺が陽乃さんをかっさらってその婚約者を溢れさせるってか。
「陽乃さんがそれを受け入れるかはわからないぞ」
あの人がその可能性に気付かないはずがない。その手段をとっていないということは、そこに何かしらの理由があるはずだ。
「客観的な、前の彼女の俯瞰した態度だと難しいだろうね。ただ今は違う」
「何を根拠に」
「お前のことが好きだろ、陽乃さんは」
一切の淀みのない視線。俺は否定しない。それが事実だと、それこ

そ客観的に理解している。
「比企谷、そもそもあの人の性格を考えてみろ。彼女が告白するなんて選択をとると予想できたかい？」
「手段は選ばない人だ」
「自分の仮面を守りつつならね」
「……何が言いたいんだよ」
「何故そんな行動をしたのか。言い換えるなら、何故いつものやり方じゃなく短期で決めることの出来る方法をとったのか」
勿体つけた言い方。口を挟まずに葉山の答えを待つ。

「相模さんに取られることを恐れたんだ」

数秒、俺は口を開くことを忘れた。突拍子のない名前に、思わず目を丸くした。

「お前今相模って言ったのか？」
「ああ」
「取られるってのは何だ」
「言葉通りの意味さ。陽乃さんは相模さんに比企谷を取られることを恐れた」
「……ちょっと待て。その前提には俺が陽乃さんより相模を優先することが必要だ」
今までの事を見てそれを言っているのなら、葉山は有り体に言ってどうかしている。
「それに相模が俺のことを好きになる必要だって……」
いや、結果は何故か好きになられたのだが。正確に言うと依存されかけたのだが。しかし葉山のこの物言い、まるで相模が俺のことを好きという確証を得ているようにも感じる。
「……相模から相談とか受けてたのか」
だとしたら辻褄は合う。……いや、合わないのか。相模は俺が委員会をやめた直後に告白してきた。そして好きになるタイミングはそ

の委員会。知る由もない、はず。
だとしたら、こいつの不気味な確信は何だ。
「比企谷にしては察しが悪いな。……いや、俺に対する固定観念の問題かな」
「意味がわからん。確かに相模が俺を好きになれば、陽乃さんは手段を選ばずに俺を手に入れようとしてくるかもしれない」
傲慢な前提条件には目を瞑る。
「少なからず俺への執着はあっただろうしな。期待感もあったかもしれない。もしも本当に上手く行けばそのまま婚約の話は破談、陽乃さんも俺を捕まえることもでき、ついでに言えばお前ご執心の雪ノ下の依存先、つまり奉仕部所属の異性が他の女のものになるわけだ」
雪ノ下が奉仕部から俺に依存しないとも限らない。もしそうなれば葉山にとっては都合の悪い話だ。
勿論出来すぎな妄想話。だがありえないことはない。
……逆に考えてみると、相模が俺を好きになれば最善の結果になる可能性があるとも――
「お前、全部その通りに運ぶつもりだったのか。だとしたら、一体どこから――」
「相模さんが君を好きになるところからだよ」
さも当たり前のように、葉山は答える。不敵に笑う顔は底冷えするような冷気を纏っていた。
「なぜいつも君にも伝える委員長の仕事をああも都合良く伝えなかったと思う？」
「は……？」
「代わりに俺が聞いたんだよ。まあそこで相模さんが成長していたら別の策を考えたんだけど、見事にミスってくれたしね」
「お前、それであの日俺と相模を一緒にしたのか」
「その方が相模さんは比企谷のことを意識すると思った。結果は見ての通りさ」

……明らかに以前の葉山とは異なる。はっきり言って異質だ。人の想いを踏みにじることを、過去の葉山が許すはずもない。
それほどまでに根が深い問題なのか。生憎検討はつかない。
「……そこまでやってやっと相模さんを君にぶつけて、思い通りに陽乃さんも焦って、場は整ったと思ったんだけどね」
「陽乃さんが焦るってのは違うだろ」
「今更揚げ足を取ったところで無意味だ。そうでなくとも今のは揚げ足ですらないけど。相模さんに依存傾向があるのは彼女も敏感に感じとっていたんじゃないか？　実の妹でそういうのは嫌という程慣れてるだろうし」
言い返すことが出来ない。合理的という話をすればこいつの言葉は何一つ間違ったところはなく、頷くことしか出来ない。
こいつの行動が正しいとは思っていないから、そんなことはしないが。
「結局、お前は何が言いたい。俺に何をさせたい」
「陽乃さんを救ってくれ」
「手段は」
「俺の考えたものよりも比企谷の出した答えの方が彼女は喜ぶよ」
「……」
風向きが変わる。豪雨は横薙ぎになり、大粒の雫は足元から膝にかけて降り注ぐ。
「……なあ」
「どうした？」
葉山の表情は真剣そのもの。俺は目を逸らした。
「二つ、思いついた」
「……どんなのかは聞かないよ。ただ、どっちが比企谷らしい救い方だ？」
「安心しろ」
短く言い捨てる。投げやりにも見える俺の物言いは、果たして葉山にはどう映っただろうか。
「俺らしいのは、一つ目がダメだった時しかしない」

「……叶うことなら、一つ目で救えることを願ってるよ」
葉山は重い息を吐く。疲労感は見え見えだ。
「じゃあ比企谷、後は任せた」
「おう」
別れ際の言葉は呆気なく、殆ど意味をなさない傘を差して葉山は歩き出す。
「葉山」
行く寸前、俺は最後に葉山を引き止めた。振り返らずに立ち止まるだけで、返事も何もない。
「俺らしいとは言ったが、どちらかと言うと破滅的だぞ」
忠告と言うよりも、ただの報告。時間軸を見るとむしろ予告かもしれない。
「救えるなら何でもいいさ。俺には出来ないことだろうけどね」
俺の返事も聞かずに歩を進める。その後ろ姿はいつもの葉山と遜色ない。
ただそれが、今日はいやに気持ち悪く見えた。

１４話

土瀝青（アスファルト）を踏みつける雨足の威力はどんどん強くなっていく。この調子なら傘は差さない方がましなんじゃないかと、陽乃さんの部屋に向かう道すがら考えていた。

七〇七号室。陽乃さんは居るだろうか。こんな雨じゃ外に出るとは考えにくいが、果たして。

つくづく自分が嫌になる。付き合った翌日に別れを告げ、かと思うと十数日後にまた会いに行く。陽乃さんからすると、俺はさぞ優柔不断な男に見えていることだろう。

葉山と話した公園から陽乃さんの家までは意外と近い。すぐに到着した俺は、カバンから合鍵を出してオートロックを解除する。エレベーターの足元は既に濡れていた。

七階を知らせる間の抜けた音が耳朶に響く。エレベーターから出て一番奥の部屋。そこが彼女の誕生日を表す七〇七号室だ。

鍵を上段の鍵穴に差し込む。慣れた手つきで捻るが。

……鍵がかかっていない？

手応えはなく、それは下段も同じだった。眉をひそめつつ、ドアを開けて中へ入る。照明は点いていない。手探りで廊下を進み、リビングへ入る。

「……やっぱいないのか」

無音が鼓膜に突き刺さる。低い室温が肩にのしかかる。

陽乃さんに限って、鍵の締め忘れなんて有り得るのだろうか。何でもかんでも彼女を完璧として扱うのは失礼かもしれないが、事実としてこういったミスは犯さない人だ。何か理由がある気がしてならない。

とりあえず照明を付ける。急に入ってきた強い光に目を細めた。

「ん……？」

リビングの中央にはソファの前にテーブルが置かれている。その上に、何故か奇妙なものが鎮座していた。

両足の揃った真紅のヒール。見ただけで高価だとわかるそれは、時

折陽乃さんが履いていた靴。

どうにも、俺にはそれが飛び降り自殺によくあるアレのように見えた。

そんなことはないと思いつつ、一応ベランダまで歩く。そっと外へ身を乗り出してみるが、下には何も無い。

こんな感想を抱くのは完全に場違いだが、乗り出した時に濡れた腹の部分が気持ち悪かった。

「……」

あの人は無意味にさえ意味を持たせる。きっとこの並べられた赤いヒールにも意味があるはずだ。

――それが彼女なりのＳＯＳだってなんで気付かないんだ!!!

先程葉山に言われた言葉。飛び降り自殺とこれが、何度も脳裏をよぎる。いやでも、あの人が？　動機だってただの婚約者でか？　有り得るのか、そんなこと。

「ん？」

かさり、と足元から音が鳴る。視線を向けるとそこには一枚の便箋。足をどけると、そこには『比企谷君へ』との文字。

俺は急ぎそれを手に取り中身を読む。一瞬にして跳ねる鼓動。ドキリと鳴る胸が苦しくなった。

『比企谷君へ。これを読んでるってことは、勝手に部屋に入ったでしょ？　別れたって言うのに、君は勝手だね』

勿論俺だってそう思っていますよ。

『さて、私の部屋に来てくれた理由予想とかもして良いんだけどさ。

間違えてたら恥ずかしいからやめとく。代わりに一つだけ問題を出そうかな？　答え合わせは次に出逢えた時！』

あなたが間違えることなんて殆どないでしょうに。てか唐突の問題の意味がわかりませんよ。

それに、出会うじゃなくて〝出逢う〟か。一々ミステリアスな人だ。

『勘違いの定義とは何でしょう？』

「……クソッ!!」

手紙をそこまでを読むなり、俺はすぐさま駆け出した。残りの文なんて知らない。ただそれよりも、嫌なパズルのピースがどんどんハマっていくのだ。

傘立てから傘を抜くこともせず、階段を駆け下りる。豪雨など関係なしにエントランスを走り抜け、ある場所へと向かう。

端的に言えば、やはり陽乃さんは自殺しようとしているはずだ。

まず解錠されっぱなしの部屋。もう七〇七号室に戻る気はないという意思表示だろう。何を盗られてももう関係ないから。

次にあのヒール。あれは第一印象の通り、自殺の暗示。それも恐らく飛び降り自殺の。

そしてあの手紙にあった勘違いの定義。それは即ち再会した時の別れ際に言われた言葉だ。よくもまあ覚えていられたものである。

強い雨の中を傘も差さずに走る。足元が濡れているので時折滑りそうになるが、そんなタイムロスさえ惜しい。必死に堪える。

息も絶え絶えに、あの橋へ向かう。下の川の流れが美しく、桜の花

弁が降りそそぐところ。素の彼女と初めて対面した場所。

鼓膜に響く雨の音はまるでテレビの砂嵐のようだ。荒い音が一様に俺を取り巻く。

体温が徐々に奪われる中、やっとのことで橋へと到着する。雨は先程よりも強くなっており、肌を叩く雨粒は痛く感じる程だ。

「はぁ、はぁ……、陽乃さんっ!!!」

橋の上に人が居るかも確認しないで、大声で絶叫する。もしも陽乃さんがいなかったら。そんなことは露ほども考えていなかった。

だって、どうせ居るんでしょう？

「……よく見つけられたね、比企谷君」

机の上のヒールと似た色をした深い赤の傘。陽乃さんはいつもの表情でそう呟いた。

「あれだけヒントを出してもらえてるんです。見つけてと言っているようなものですよ」

「かもね」

「死ぬんですか？」

「かもねー」

間延びした声からは何も読み取れない。元より読み取れるとは思っていない。

「あ、そうだ比企谷君」

「はい？」

陽乃さんの視線が俺の目を射抜く。俺は思わず身震いしてしまった。

「最後だし、香り。嗅ぐ？」

「良いんですか？」
「うん。雨だから落ちちゃってるかもだけど」
「……むしろ強まっていますよ。こんな状況ですし」
「ん？　それは香りの正体が何かわかってるってことかな？」
　彼女の俺を惹き付けて止まない香りの正体。病人達にも感じたそれ。
「言わば、死臭みたいなもんだと思います」
「失礼だな君は。そんな匂いさせてる覚えないけど」
「プルースト効果というか、ともかく死に近い人からそれを感じとっているんですよね」
「逆説的な使い方だね。だから病院近くの並木道でも言ってた、ってこと？」
「それに陽乃さん、再会した当初も死のうと思っていたでしょう」
　毅然と言い放つ。
「うん」
「やけにあっさりしてますね」
「何かどうでも良くなってきちゃった」
　陽乃さんは傘を下の川へ投げ捨て、橋へもたれかかった。
「まあ比企谷君なら来てくれる、なんて思ったのは事実だけどさ。だからと言って生きろとかいう無責任な言葉に応じる気はないんだよね」
「問題を起こしましょう」
「それで雪ノ下家の威信を失墜させようって？　どうせ内々に処理されるよ。君もわかってるんじゃないかな」
　……まあ、それに応じないのはわかっていた。葉山に言った一つ目の策なんてこんなもんだ。端から上手くいくなんて思っていない。
「……じゃあ、陽乃さん」
「待って」
「え？」
「空見て。凄いね」
　何を言い出すのか。雨が降ってて見上げるのは、と思ったがいつの

間にか止んでいた。

――止んでいた？　こんな、雨台風の中？

「――おお」

「ね。凄いでしょ？」

空には満天の星空が広がっている。雲一つない夜空は、これまでに見た空の中で最も幻想的だった。

「台風の目、ですかね」

「だねー。ほら、下も見て。こんな綺麗な夜なのに川だけは荒れまくり」

荒々しく流れる川はいつもの二倍以上の速さであり、あの中に落ちればひとたまりもない。

「……雨でちゃんと見えていませんでしたけど、お互いびしょびしょですね」

何とか間を持たせようと目についた情報を口にするが、陽乃さんは何も言わない。ただ俺よりも先の、遥か遠くを見ているように感じた。

「……ダメだなあ」

かと思うと、唐突に陽乃さんが口を開く。右手では髪の毛をいじっていた。

「比企谷君と居ると、もっと生きたくなっちゃう」

「……」

彼女の呟いた願望は、同時に目標と相反するものだ。彼女が死にたがる理由。それが単に陽乃さん自身疲れたから、なんて馬鹿げたものだけのはずもないのだ。

そして悲しいことに俺は、それをきちんと理解してしまっているのだ。故に。

「俺達は、もう会わない方が良いかもしれませんね」

俺は彼女の意思を尊重する。今の本音は戯言として、残酷に受け入れる。

「……うん。そうかもね」

……それを望んだのはあなたでしょう、陽乃さん。

だから、そんな寂しそうな顔をしないでください。俺だって、本当は――

陽乃さんは俺と目を合わせないためか、橋の下に流れる川を眺めていた。死を間近に感じさせるような、今の綺麗な夜とは酷く対照的に見える流れ。

「比企谷君が言わなかったら、私が言ってたよ」

辛そうな笑顔でそう言う。射抜く視線を初めて見つめ返すが、しかし熱を帯びる前に逸れた。

「まあ、俺なんかに陽乃さんは勿体ないですから」

そう考えでもしなければ抑えられない。感情は溢れっぱなしで、そんな強がりに陽乃さんは気付いているような気がした。

「陽乃さん」

「何？」

頼むから、そんな縋る目で見ないでください。このままだと、本当に間違いを――

「今まで言ったことありませんでしたね」

何を口走るつもりなのか。俺は理性の利かない感情に身を任せて。

「好きです、陽乃さん」

その瞬間、交わった俺達の視線は確かに熱を帯びた。

「……私も。本当は君のことが大好きだよ。いつも言ってくれなかったから意地張ってたけど、再会してからずっと好き」
「付き合います？」
「今度は嘘じゃないの？」
「ええ」
「じゃあ不合格かな」
「……陽乃さん、思ったよりも強情ですね」
　言いたいことはわかる。一時の感情に任せて付き合ったところで問題は何一つ解決しない。それでは何もかもが無意味だ。
「整理しましょうか」
「良いけど、何を？」
「陽乃さんの目的と願望、それに俺が出来ることです」
「じゃあお姉さんは聞き手に徹しようかな」
「……まず、陽乃さんの目的は自分の人生を人に決められたくないから婚約破談。それにその役目を雪ノ下にもさせないこと」
　ここに間違いはないはずだ。何故なら単なる事実を述べているだけだから。
「次に願望。……自分で言うのもなんですけど、俺と一緒になりたいんですよね？」
「言わせたがり」
「俺は陽乃さんのことが好きですよ」
「……私も、だけど」
　口を尖らせて言う。まるで歳下のような振る舞いに自然と頬が綻

んだ。
「そして俺に何が出来るか」
「正直わかってるでしょ？　私、初めの方は共犯者が欲しかったの」
　初めと言うと、再会したあの時だろう。
「……いや、まあ理解はしています。そのつもりで来たところはありますし」
「そっか」
　陽乃さんは至って冷静に見える。
「永遠に一緒に居られたら良いんだけどね」
　そんな彼女を見て、俺は思わず抱きしめ――

――その勢いのまま、陽乃さんを道連れに橋から荒々しい川へと落下した。

傍から見ればただの投身自殺。だがこれは意味のある自殺だ。
長女、雪ノ下陽乃が死ねば、それも自殺ならば雪ノ下家の株は下がりはすれど上がることは無い。不審に思われるに決まっている。
だとすると婚約相手の会社も撤退せざるを得ない。そうなれば雪ノ下の婚約者として回されるなんて話はなくなる。
もう一つ大事なのは、彼女が俺を欲していること。言うなればこれは自殺教唆とも言える陽乃さんの告白だが、受け入れたのだから問題ない。この人と共に死ねる。ずっと一緒に居られる。その事実だけがあれば良い。

俺達の体が着水する寸前、陽乃さんの口元が動いた気がした。初めの文字は〝え行〟。そして。

『せ・い・か・い』

本当に、この人は最後の最後まで俺を喜ばせてくれる。死ぬ前にこれほど狂喜で満ち溢れた人間は世界でも俺くらいだろう。

身体が水に叩きつけられ、川底へ沈む。

俺は最後に認めてもらえたのだろうか。全身を包む冷たい死が、俺の腕の中にある生きた温もりを際立たせる。彼女の言う永遠がこれだとしたら、俺はなんて幸せ者なんだ。大往生の末の老衰よりも、息子や孫達に囲まれて見送られるよりも、俺にとってはこれが最も価値を持つ死に方だ。

薄れゆく意識の中、最後に目を薄く開けた。同じタイミングだったのか、陽乃さんも細めた目で俺を見ていた。息も出来ず、体は冷えていくばかりだが、俺達は確かに笑いあった。

満足して目を閉じる直前、あることに気付いた。いや、気付けたと言うべきか。

――彼女は泣いていた。涙を見たわけでも、嗚咽を聞いたわけでもない。しかし泣いたと確信した理由は、彼女がこれまでにないほど嬉しそうに笑っていたから。涙を流す理由なんて、これだけで充分だろう。

――ほら、やっぱり泣けるじゃないですか。

――君のおかげだよ。ありがとう。

――貴方と出逢えて、貴方と死ねて本当に良かった。

――……それはこっちの台詞。愛してるよ、八幡君。

そして俺達は、その最高の一時を永遠のものへと昇華させた。